

保護者集団による 学校支援ボランティアの活動の実態 および家庭教育の意識に関する調査研究

竹村 耕生

【目次】

I 章 調査の概要

1節 調査目的および調査内容

2節 調査方法

II 章 調査結果の概要

1節 回答者の基本的属性

2節 学校支援ボランティア経験の有無とPTA活動への関わり方

3節

学校支援ボランティア経験のない理由と今後の意向

4節

学校支援ボランティアをおこなった動機と活動分野

5節 学校支援ボランティア経験による自分への影響や自己の変容

6節

学校支援ボランティア経験者の今後の活動への意向

7節 学校支援ボランティア経験の有無と家庭教育の意識との関係

III 章 まとめ

1節 調査結果の要約とまとめ

付録 アンケート調査票

I 章 調査の概要

1 節 調査目的および調査内容

(1) 調査名

本調査は、以下のように表題を付して行ったものである。

学校支援ボランティアの活動の実態および家庭の意識に関する調査

(2) 調査目的

保護者や祖父母による学校支援ボランティアの活動の実態や家庭教育の意識について調査する。また、調査結果について集計分析を行い、「保護者や祖父母が学校支援ボランティアを行うことが、家庭教育にも何らかのよい効果をもたらす」という仮説が妥当か否かを検証する。

(3) テーマ設定の意図

今日の学校教育が抱える問題、また教育課題は非常に多岐にわたり、学校の中だけでは解決できないものも多い。そこで近年、学校と家庭・地域の連携・協働の重要性が特に高まってきたのは周知の通りであり、平成18年12月15日に改正された教育基本法でも第十三条に「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」の条文が新設された。一方で、家庭の教育力の低下が叫ばれて久しく、同じく改正教育基本法の第十条に「家庭教育」の条文も新設された。そのような現状の中で、ここ数年「学校支援ボランティア」の活動が各方面で盛んになり、かつ注目を集めている。

そこで、私は「保護者集団（ここでは、家庭で子どもの教育を担う父親・母親・祖父・祖母を保護者集団と定義する）が、学校支援ボランティアを行うことが、家庭教育にも何らかのよい効果を上げることに繋がっていくのではないか」という仮説を立てた。つまり、父親・母親・祖父・祖母らが学校支援ボランティアを行うことによって、学校に関わったり自分の子(孫)以外の子と接したりする機会が多くなることで、家庭での教育による効果をもたらしていくのではないかと考えたのである。上記の仮説を、アンケート調査を通して、保護者集団による学校支援ボランティアの活動の実態を分析しながら検証していきたい。

(4) 調査対象者

調査対象者は、現勤務校の栃木県宇都宮市立陽光小学校に通学している子どものいる全世帯（283世帯）の父親、母親、祖父、祖母である。

(5) 調査項目

調査開始時に指定した調査項目は以下のとおりである。

- 回答者の基本的属性（子に対する続柄と年齢）
- 保護者と祖父母の学校支援ボランティア経験の有無
- 保護者と祖父母の学校支援ボランティアを行おうとした動機と行わない理由
- 保護者と祖父母の学校支援ボランティア経験による自分への影響や自己の変容
- 保護者と祖父母の行った学校支援ボランティアの分野と今後行いたい分野
- 保護者と祖父母のPTA活動への関わり方に対する認識
- 保護者と祖父母の家庭教育に対する意識

(6) 調査実施主体

本調査は、竹村耕生（宇都宮大学生涯学習教育研究センター後期内地留学生）が、半年（平成18年10月～平成

19年3月）にわたる内地留学の研究の一環として行ったものである。

なお、本調査のアンケート調査票の枠組み、報告書の記述形式、分析の視点などに関しては、宇都宮大学生涯学習教育研究センター佐々木英和助教授の指導を受けた。

2節 調査方法

(1) 調査方法

調査は、アンケート調査票に自記式で回答してもらう形により行った。

(2) 調査の実施時期

アンケート調査実施期間として「2007年2月7日～2007年2月14日」の計8日間を設定し、この期間内に学校の各担任の教員に提出するという方法で回収した。ただし、この期間以降に提出されたものであっても、データ入力作業および単純集計作業の終了までに間に合ったものについては、回答者として扱った。

この報告書の見方

- 1 調査結果について、原則として人数については整数（～人）、割合については百分比（～％）で表した。
- 2 割合についての値はすべて小数第2位を四捨五入し、小数第1位まで示している。なお、四捨五入の結果、個々の比率の合計と全体を表す数値とが一致しない場合がある。
- 3 原則として、本文中の数表・グラフの中では、「無効回答」および「無回答」の人数や割合については省略した。そのため、人数および比率について、個々の数字を合計しても全体の合計と一致しない場合がある。なお、ここでいう「無回答」とは、調査票の設計上、その問いに対して回答する資格があるにもかかわらず回答していないものを指す。また、「無効回答」とは、調査票の設計上、その問いに対して回答する資格がないにもかかわらず、回答しているものを指す。

II章 調査結果の概要

1節 回答者の基本的属性

(1) 回答者の子に対する続柄

今回の調査では、1世帯で父親、母親、祖父、祖母など複数回答することを想定し、3枚の調査票をセットにして配布した。従って、総配布部数は、全世帯数283

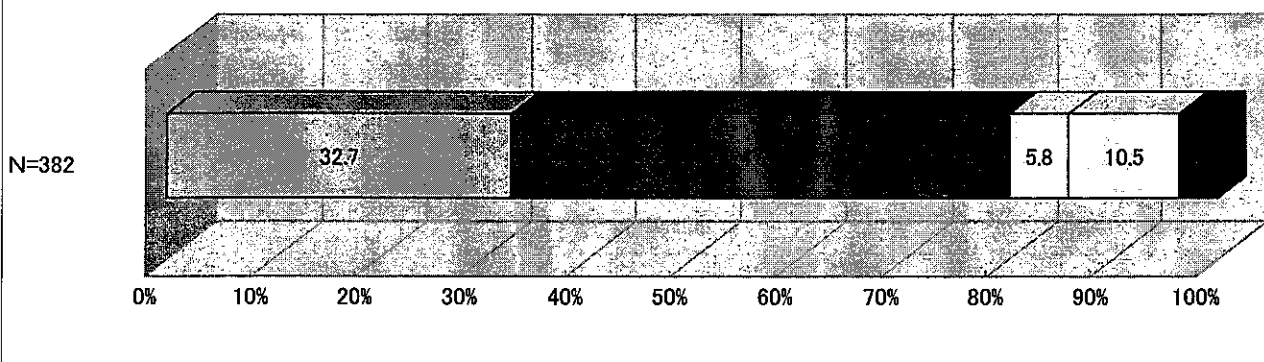
×3枚＝849枚となる。

各世帯の家族構成（祖父や祖母の同居の有無）を調べた上で配布したわけではないので、正確な回収率を計算することはできないが、382部の回収ができ、数字上では約45%の回収率であった。核家族が半数以上ということ考えると、実際はもっと高い回収率になると思われる。

【グラフ1-1-1】

A.あなたは以下のどれに該当しますか。

☐ 父親 ■ 母親 □ 祖父 □ 祖母 ■ その他



【グラフ1-1-1】は回答者の子に対する続柄を表すものである。当然ながら父親と母親の数が多いが、母親の方が父親に比べて約15ポイント（56人）多く回答している。父親と母親を合わせると全体の約80%となる。また、

(2) 回答者の年齢

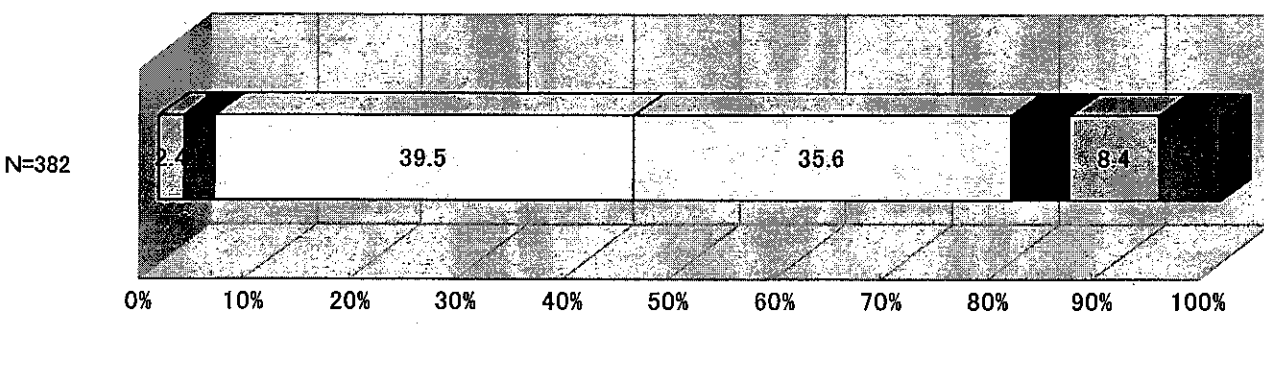
【グラフ1-2-1】は、回答者の年齢を集計し年齢別にその割合を示したものである。年齢別で見ると、小学生の保護者が中心なので必然的に30代と40代に集中した。30代の回答者は151人で全体の39.5%、続いて多いのが40代の136人で、これは全体の35.6%にあたる。以下、60代が32人で8.4%、70代以上が22人で5.8%、50代

祖父と祖母を合わせると62人（16.3%）となり、全体の2割弱を占めた。「その他」は14名いたが、叔父・叔母が5名、兄・姉が9名であった。なお、それぞれの具体的な人数については、【表1-2-2】に示したとおりである。が21人で5.5%、20代が11人で2.9%であった。なお、10代が9人（2.4%）いるが、これは兄または姉である。今後、このアンケートを読み進めていく際には、全体で集計を行った場合、30代から40代の保護者の意向が強く反映されている可能性もあることに注意しながら数字を読み取っていく必要がある。

【グラフ1-2-1】

B.あなたの現在の年齢は、以下のどれに該当しますか。

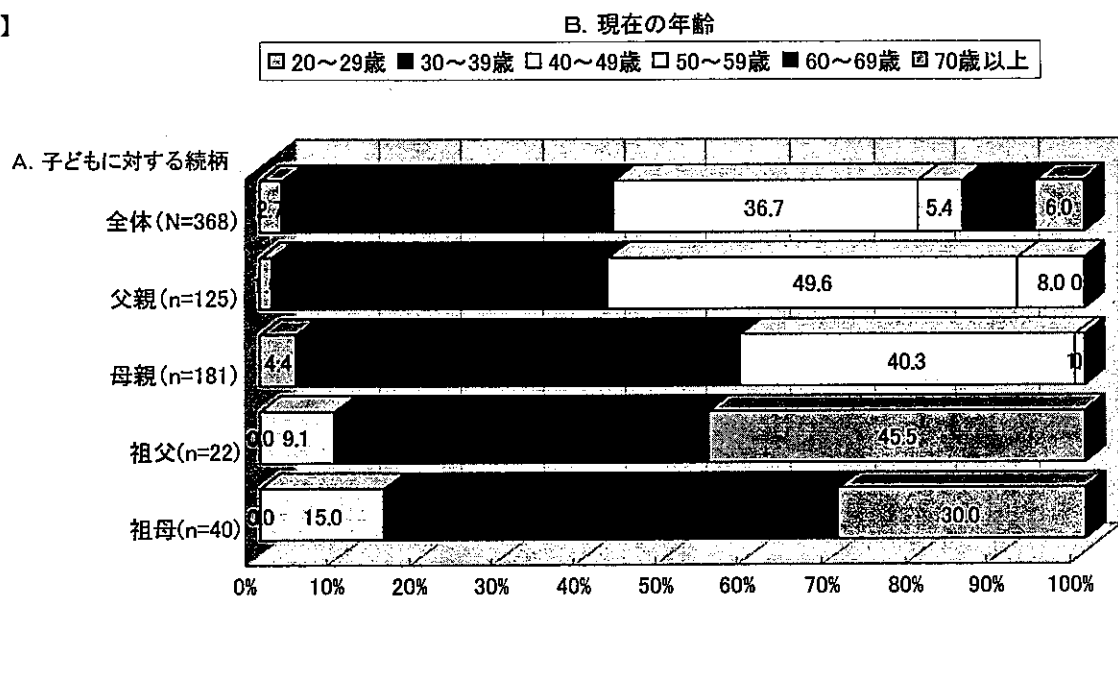
☐ ~19歳 ■ 20~29歳 □ 30~39歳 □ 40~49歳 ■ 50~59歳 □ 60~69歳 ■ 70歳以上



【表1-2-2】

年齢	19歳	20	30	40	50	60	70歳	総計
	以下	~ 29歳	~ 39歳	~ 49歳	~ 59歳	~ 69歳	以上	
父親		2	51	62	10			125人
母親		8	98	73	2			181人
祖父					2	10	10	22人
祖母					6	22	12	40人
その他（叔父・叔母）		1	2	1	1			5人
その他（兄・姉）	9							9人

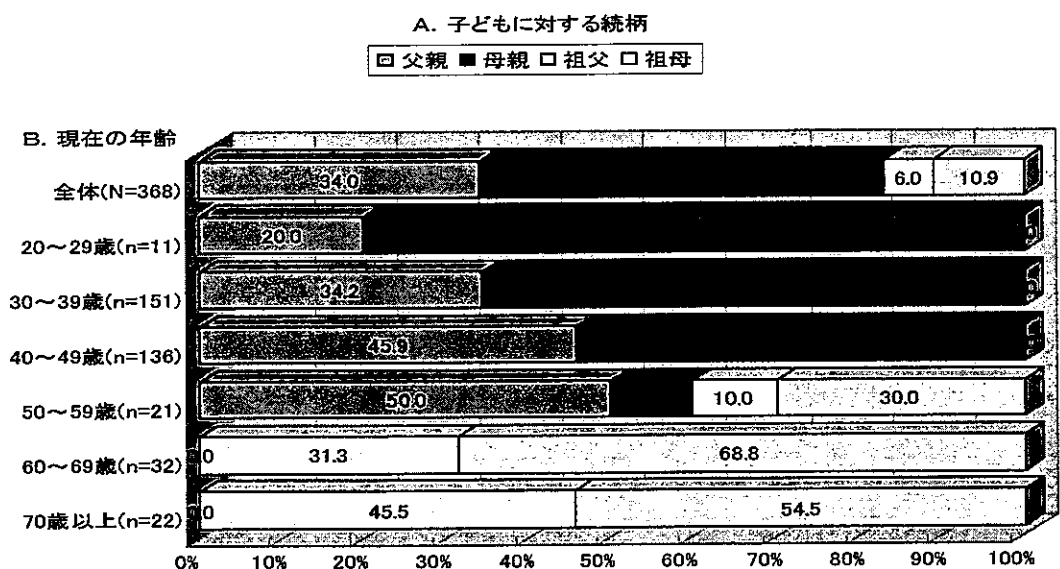
【グラフ1-2-3】



【グラフ1-2-3】は回答者の年齢を子どもに対する続柄別に集計したものである。このグラフから、母親で最も多いのは30代で、これは母親全体の54.1%にあたる事がわかる。それに対して、父親では40代が最も多く、これは父親全体の49.6%にあたる。30代の父親も40.8%と多く、40代との差は8.8ポイントであった。祖母においては、60代が最も多く祖母全体の55.0%、祖父におい

ては60代と70代以上が同数（10人ずつ）で、合わせると祖父全体の91%になった。祖父と祖母で70代以上の占める割合を比べると、祖父の方が約16ポイント高い。逆に50代の占める割合は、祖母の方が約6ポイント高いことがわかる。なお、その他（叔父叔母・兄弟）を集計から除外したため、全体の割合は【グラフ1-2-1】と若干の誤差が生じている。

【グラフ1-2-4】



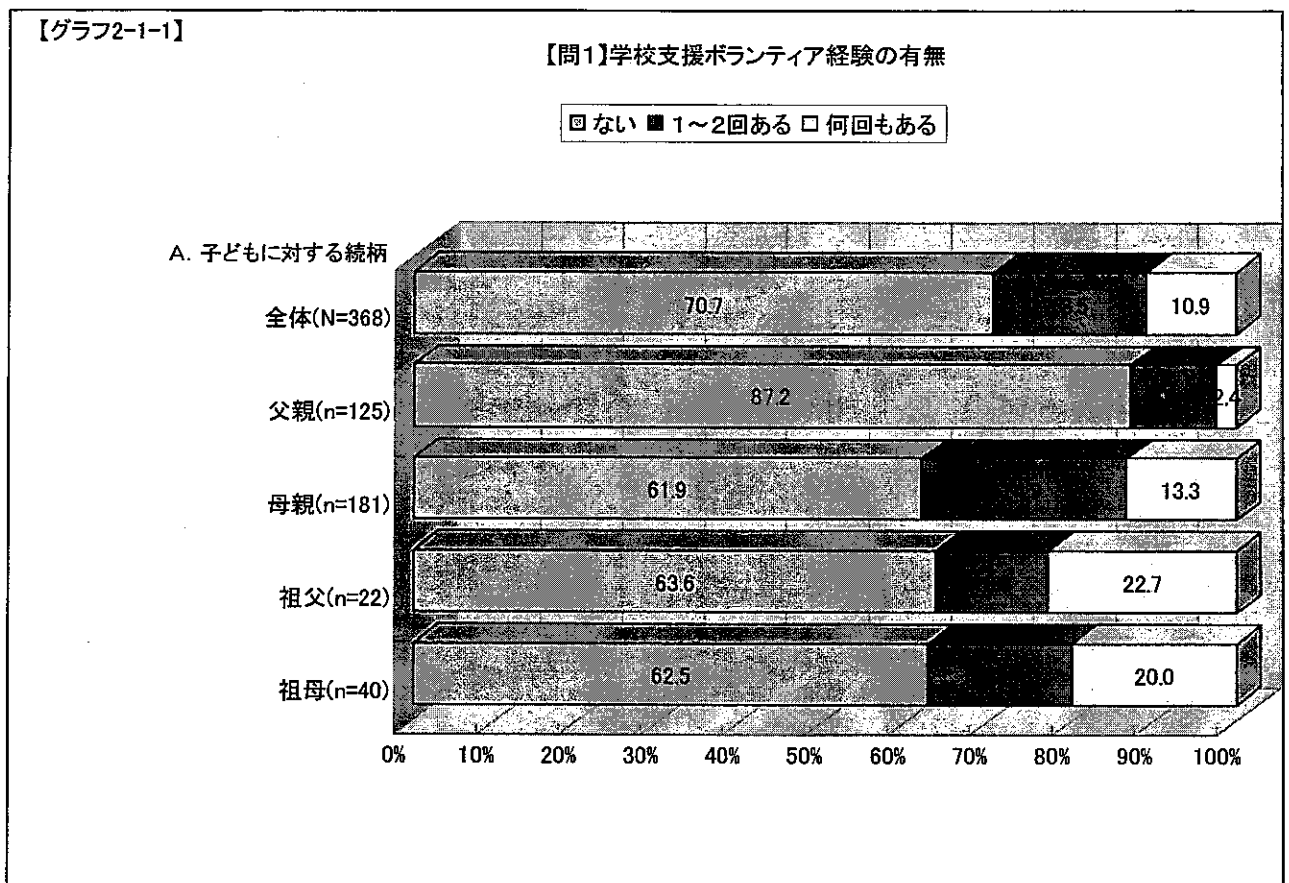
【グラフ1-2-4】は【グラフ1-2-3】の縦と横を入れ替えて回答者の子どもに対する続柄を年齢別に集計したものである。このグラフから20代、30代、40代は父親と母親のみで構成され、50代には父親、母親、祖父、祖母が混在し、60代、70代は祖父と祖母のみで構成されていることがわかる。母親の占める割合は、20代において最も多

く(80.0%)、以下50代までにかけて割合が減少していく。逆に父親は、20代、30代、と徐々に割合が増えていき、50代において最も多くなる(50.0%)。50代以上で祖父と祖母の割合を比較するといずれも祖母の割合の方が高くなっている。

2節 学校支援ボランティア経験の有無とPTA活動への関わり方

ここでは、回答者のこれまでの学校支援ボランティア経験の有無の実態、並びに、これまでのPTA活動への関わり方の認識をとらえていく。特に、続柄別にどのような傾向にあるかを把握していく方向である。

(1) 学校支援ボランティア経験の有無



【グラフ2-1-1】は、現在、子どもや孫が通う学校での学校支援ボランティアの経験の有無を続柄別に比較できる形で表したものである。

今回の調査票では、経験の有無を「まったくおこなったことはない」「1～2回おこなったことがある」「何回もおこなったことがある」の3つから選択してもらうこととした。つまり、経験の有無を「まったくの未経験」「多少の経験有り」「ある程度継続して経験有り」の3つの立場で回答してもらうこととした。

まず、全体を概観してみると「まったくおこなったことはない」と回答した人が全体の70.7%いた。そして、

「1～2回おこなったことがある」と回答した人が18.5%、「何回もおこなったことがある」と回答した人は10.9%であった。つまり、保護者集団(父親・母親・祖父・祖母)のうち、約3割(29.4%＝「1～2回おこなったことがある」18.5%＋「何回もおこなったことがある」10.9%)は、学校支援ボランティアの経験があると言える。

次に、学校支援ボランティア経験の有無を続柄別に見ていくこととする。

まず、母親では「1～2回おこなったことがある」と回答した人の割合が24.9%と、他の続柄と比べて最も高い

ことがわかる。そして、母親全体のほぼ4割(38.2%＝「1～2回おこなったことがある」24.9%+「何回もおこなったことがある」13.3%)が学校支援ボランティアの経験があることがわかる。

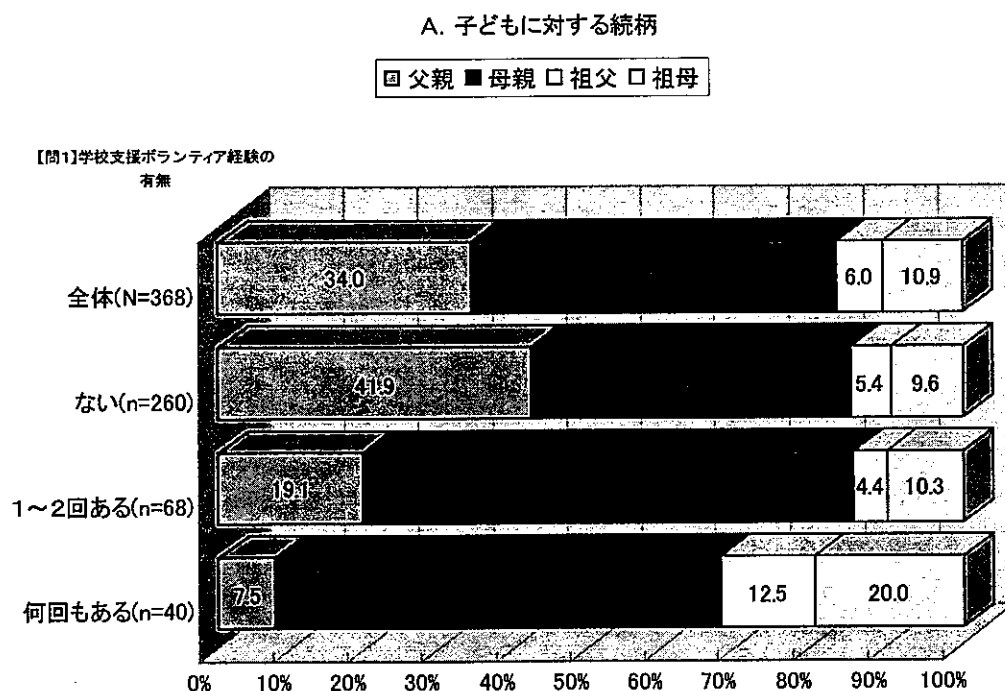
一方、父親では「何回もおこなったことがある」人が他の続柄と比べて一番少なく、わずか2.4%である。学校支援ボランティアを経験した人は父親全体の1割強(12.8%＝「1～2回おこなったことがある」10.4%+「何回もおこなったことがある」2.4%)で、母親に比べると学校支援ボランティアの経験の度合いが低いことがわかる。「まったくおこなったことはない」と回答した人の割合は、父親全体の87.2%いた。

さて、それに対して、祖父・祖母では、それぞれ4割弱(祖父36.3%＝「1～2回おこなったことがある」13.6

%+「何回もおこなったことがある」22.7%、祖母37.5%＝「1～2回おこなったことがある」17.5%+「何回もおこなったことがある」20.0%)が学校支援ボランティアの経験がある。特に「何回もおこなったことがある」と回答した人の割合が、祖父・祖母ともに2割以上を占め、父親はもちろん、母親と比べても特に高いことがわかる。特に、祖父は、4者の中で最も高い22.7%が、学校支援ボランティアを「何回もおこなったことがある」と回答している。

これらのことから、現在、学校支援ボランティアの中心になっているのは母親であることがわかる。また、人数は少ないが、祖父と祖母も主な担い手であると言えるであろう。

【グラフ2-1-2】



【グラフ2-1-2】は【グラフ2-1-1】の縦軸、横軸を入れ替えて、「全くの未経験」「多少の経験有り」「ある程度継続して経験有り」の3つの立場ごとに占める続柄の割合が比較できるように示したグラフである。

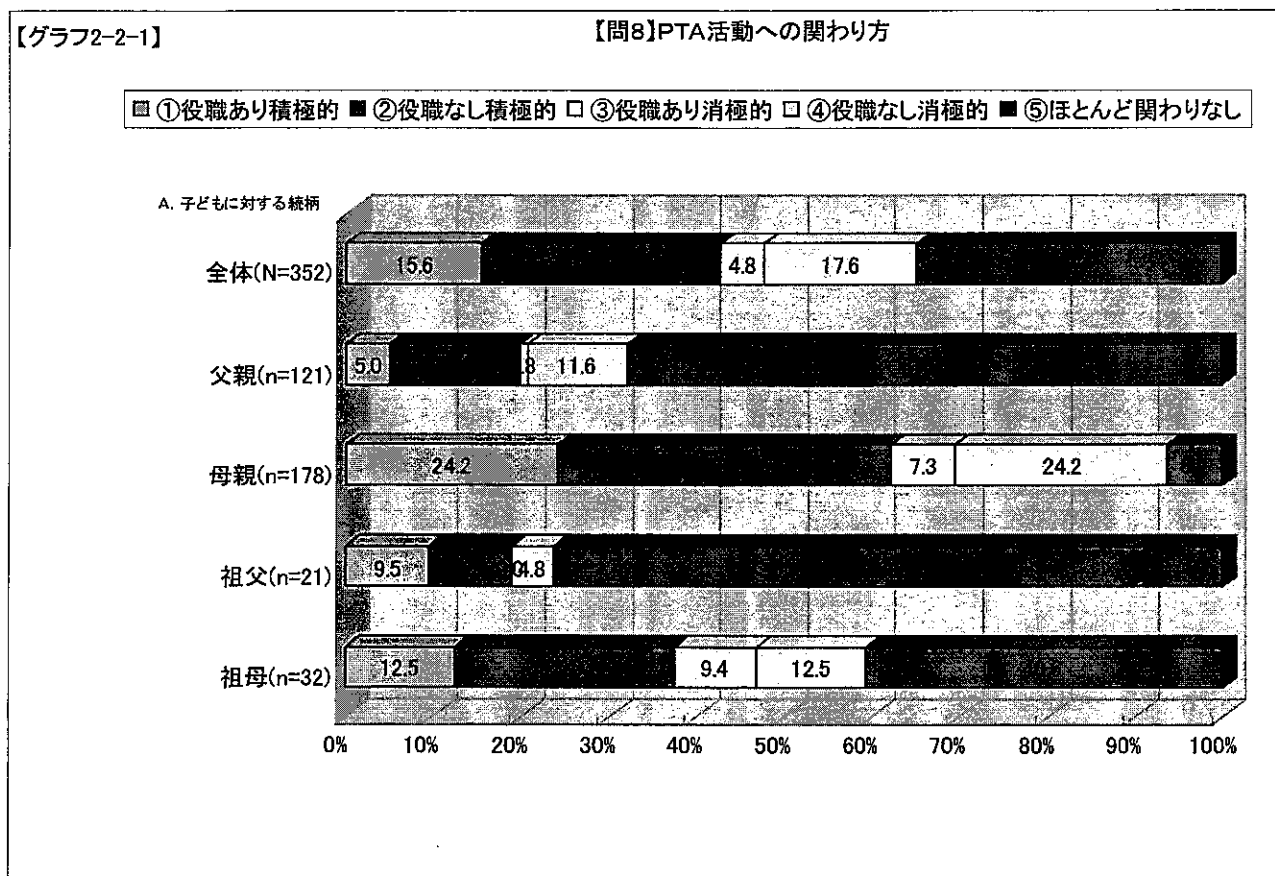
まず、学校支援ボランティアを「何回もおこなったことがある」と回答した10.9%の内訳は、6割を母親が占めていることがわかる。また、「1～2回おこなったことがある」と回答した人でも、母親の割合が一番多く66.

2%を占める。このことから、学校支援ボランティアの中心になっているのは母親であることがわかる。また、「何回もおこなったことがある」人のうち、2割を占める祖母も、学校支援ボランティアの主な担い手であると言えることができよう。また、このグラフで特徴的なのは、父親の割合が大きく減っていくことである。学校支援ボランティアを「まったくおこなったことはない」に占める割合が41.9%であるのに対して、「1～2回おこな

たことがある」は19.1%，更に「何回もおこなったことがある」は7.5%と、割合が減っていく。仕事を持って

いる父親は、当然のことながら、継続的にボランティアに参加する機会は極端に少ないと言える。

(2) P T A活動への関わり方の実態



【グラフ2-2-1】は現在、PTA活動に対しての関わり具合(問8)を問うた結果について、続柄別に比較できる形で示したものである。

まず、全体で見ると「PTA役員・部長(副部長)・委員長(副委員長)などで、積極的に関わってきた」と回答した人が15.6%、「役職には就かなかったが、積極的に関わってきた」と回答した人27.3%いた。合わせて、全体の4割以上の人々が積極的にPTA活動に関わってきたことがわかる。反対に、「役職には就いたが、あまり積極的には関わってこなかった」と回答した人が4.8%、「役職には就かず、あまり積極的には関わってこなかった」と回答した人が17.6%、多かったのが「ほとんど(全く)関わってこなかった」と回答した人で、全体の34.7%を占めた。つまり、全体の2割強は消極的な関わり、3割強はほとんど(全く)関わってこなかったことがわかる。

続柄別に見ていくと、母親の6割以上(62.4%＝「PTA役員・部長(副部長)・委員長(副委員長)などで、積極的に関わってきた」24.2%＋「役職には就かなか

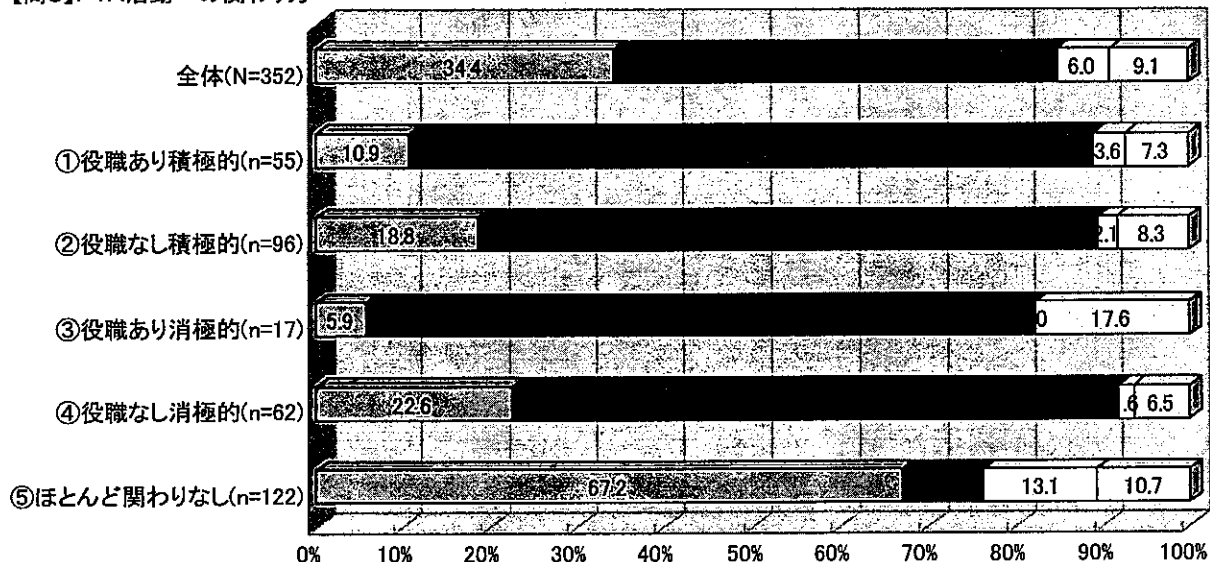
たが、積極的に関わってきた」38.2%)と祖母の4割弱(37.5%＝「PTA役員・部長(副部長)・委員長(副委員長)などで、積極的に関わってきた」12.5%＋「役職には就かなかったが、積極的に関わってきた」25.0%)が積極的に関わっているのに対して、父親の7割弱(67.8%)と祖父の8割弱(76.2%)は「ほとんど(全く)関わってこなかった」と回答している。このことから、PTA活動に積極的に関わっている人が多い母親に対して、ほとんど(あるいは全く)関わっていない人が多数を占める父親と祖父の現状が見える。ただし、父親と祖父のともに約2割(父親19.9%＝「PTA役員・部長(副部長)・委員長(副委員長)などで、積極的に関わってきた」5.0%＋「役職には就かなかったが、積極的に関わってきた」14.9%、祖父19.0%＝「PTA役員・部長(副部長)・委員長(副委員長)などで、積極的に関わってきた」9.5%＋「役職には就かなかったが、積極的に関わってきた」9.5%)は、積極的に関わってきたことも併記しておく。

【グラフ2-2-2】

A. 子どもに対する統柄

■ 父親 ■ 母親 □ 祖父 □ 祖母

【問8】PTA活動への関わり方



【グラフ2-2-2】は、【グラフ2-2-1】の縦軸と横軸を入れ替えて、PTA活動への関わり度合いごとに父親、母親、祖父、祖母が占める割合を示したものである。概観してみると、「PTA役員・部長（副部長）・委員長（副委員長）などで、積極的に関わってきた」人の約8割（78.2%）、「役職には就かなかったが、積極的に関わってきた」人の約7割（70.8%）は母親であり、PT（3）学校支援ボランティア経験の有無とPTA活動への関わり方のクロス集計

ここでは、学校支援ボランティア経験の有無とPTA活動への関わり方の比較を行うが、そのやり方としてクロス集計を用いる。つまり、ある問いに回答した人をグループ化して扱い、そのグループごとに別の問いに対して、どのように回答する傾向にあるのかの関連性を明らかにするわけである。

【グラフ2-3-1】は、回答者全員を対象として、「これまで学校支援ボランティアをおこなったことがあるか」（問1）に対する回答者が、「これまでPTA活動にどのように関わってきたか」（問8）に対してどのように回答する傾向にあるかを比較できるように、クロス集計してグラフ化したものである。

まず、PTA活動に対して「役職に就き積極的」な人

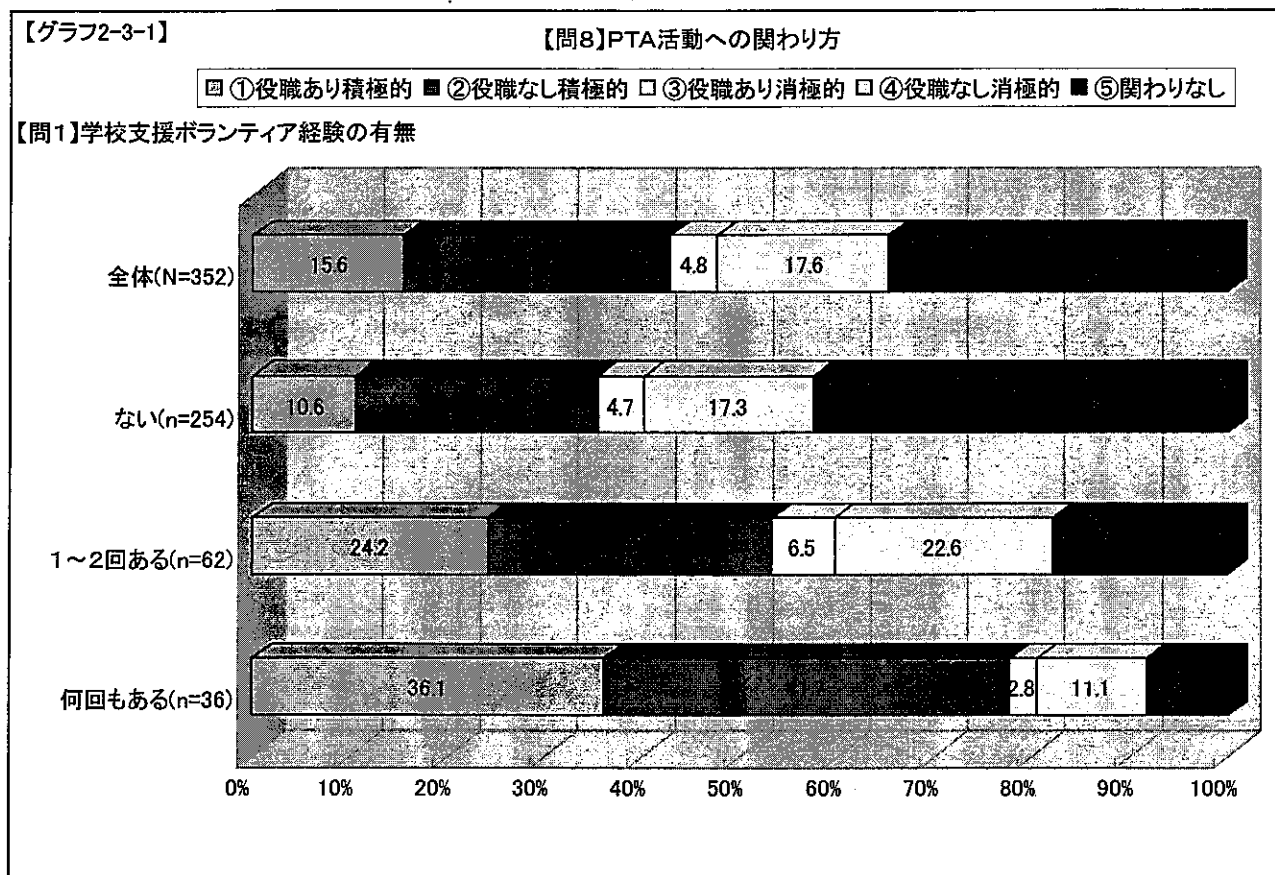
A活動の中心となっているのは前述したとおりである。それと同時に「PTA役員・部長（副部長）・委員長（副委員長）などで、積極的に関わってきた」人の約1割（10.9%）、「役職には就かなかったが、積極的に関わってきた」人の約2割（18.8%）は父親が占めているという結果も見逃すことはできない。

と「役職はないが積極的」な人の割合が、学校支援ボランティアの経験の有無との関連において、学校支援ボランティアの経験が「何回もある」人の中の8割弱を占め、他と比べて圧倒的に多いことに、グラフを一目見て気付く。

更に細かく項目ごとに、これまでPTA活動に対して「役職に就き積極的」と「役職はないが積極的」を合わせた割合を見ていくと、学校支援ボランティアの経験が「何回もある」と回答した人の中ではおよそ5人に4人（77.8%＝「役職に就き積極的」36.1%＋「役職はないが積極的」41.7%）を占め、学校支援ボランティアの経験が「1～2回ある」人の中でも2人に1人（53.2%＝「役職に就き積極的」24.2%＋「役職はないが積極的」29.0%）を占めていた。それに対して学校支援ボランティアの経験が「まったくない」と回答した人の中では約3人に1人

(35.4% = 「役職に就き積極的」10.6% + 「役職はないが積極的」24.8%)に過ぎなかった。また、学校支援ボランティアの経験が「まったくない」と回答した人の4割強がPTA活動に対して「ほとんど(全く)関わって

こなかった」と回答している。このことから、学校支援ボランティアの経験が多い人のほうが、PTA活動に関しても積極的に関わってきたという、2つの間には相関関係があることがわかる。



(4) PTA活動への関わり方と学校支援ボランティア経験の有無のクロス集計

【グラフ2-4-1】は、【グラフ2-3-1】の縦軸と横軸を入れ替えてクロス集計を行ったものである。入れ替えても、相関関係が見られるならば、PTA活動への関わりと学校支援ボランティア経験の有無には相関関係があることが裏付けられるはずである。

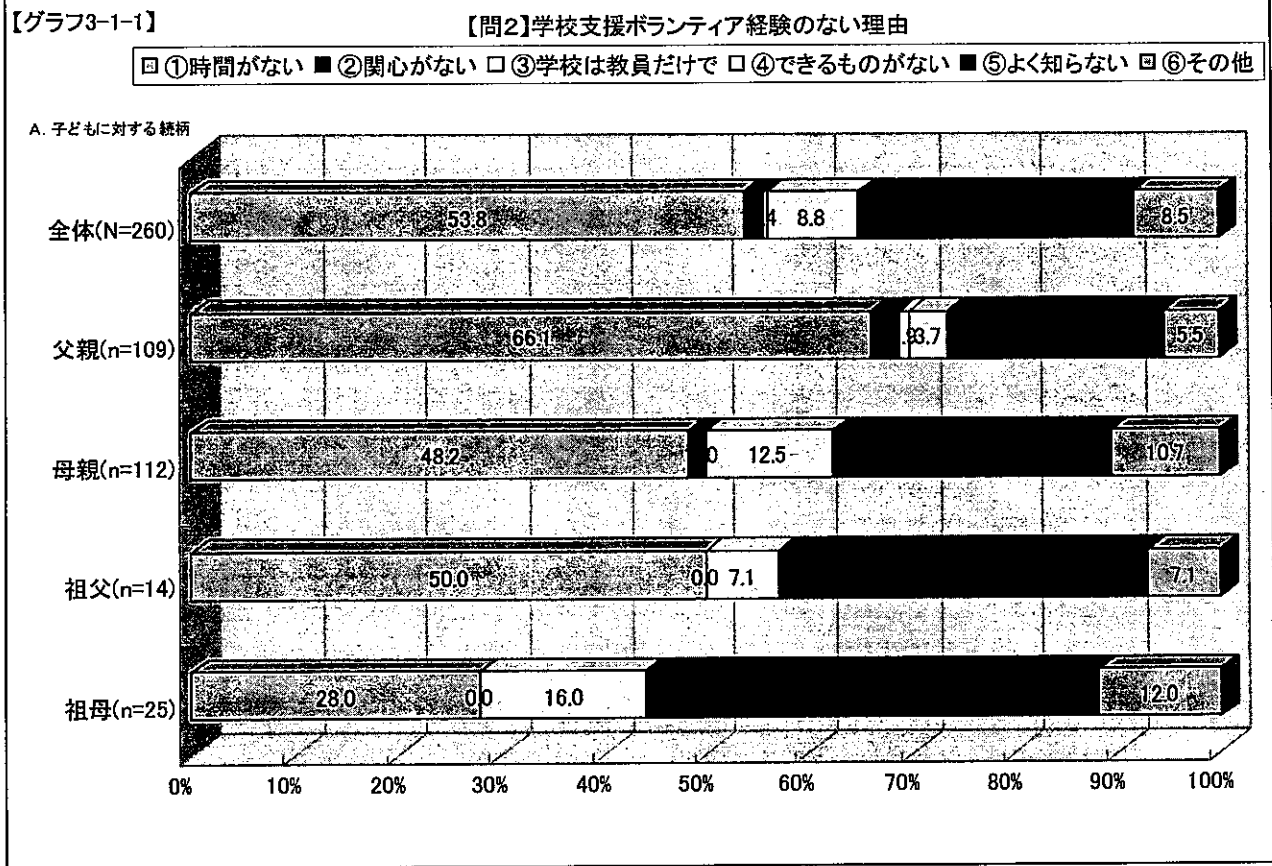
まず、PTA活動に対して「PTA役員・部長(副部長)・委員長(副委員長)などで、積極的に関わってきた」人の中では、学校支援ボランティアの経験が「1~2回ある」人(27.3%)と「何回もある」人(23.6%)を合わせると5割を超えるのに対して、PTA活動に対して「ほとんど(全く)関わってこなかった」人の中では、学校支援ボランティアの経験が「1~2回ある」人(9.0%)と「何回もある」人(2.5%)を合わせても1

割強にしかならないことがわかる。両者を比較すると、特に学校支援ボランティアの経験が「何回もある」人の割合が、片や23.6%に対して、片や2.5%に過ぎないことも大きな特徴と言えよう。更に、PTA活動に対して「ほとんど(全く)関わってこなかった」人の中で、学校支援ボランティアの経験が「まったくない」人の占める割合が、88.5%にも達していることから、逆に、PTA活動に積極的に関わってきた人ほど、学校支援ボランティアの経験が多いという、先述と裏返し結論が導かれる。ただし、「PTA役員・部長(副部長)・委員長(副委員長)などで、積極的に関わってきた」人の5割弱(49.1%)、「役職には就かなかったが、積極的に関わってきた」人の6割強が、学校支援ボランティアを未経験だという事実にも着目しておく必要がある。

3節 学校支援ボランティア経験のない理由と今後の意向

ここでは、【問1】の設問「あなたは、これまで、学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」の問いに対して、①「まったくおこなったことはない」と(1) 学校支援ボランティア経験のない理由

回答した人に「おこなったことがない理由」を問うた結果について見ていくこととする。



【グラフ3-1-1】は、【問1】において、学校支援ボランティアを①「まったくおこなったことはない」と回答した人に対して「おこなったことがない理由」を問うた結果について続柄別に比較できる形で表したものである。まず、全体を見てみると、おこなったことがない理由が大きく2つになることがわかる。1つは①「忙しくて時間がないから」と回答した人で、占める割合は一番高く、全体の53.8%になる。続いて⑤「学校支援ボランティアのことがよくわからないから」と回答した人で全体の26.5%を占める。この2つの理由だけで全体のおよそ8割になる。④「自分にもできると思われるものがないから」と回答した人は8.8%で、1割弱であった。更に、②「面倒だから・関心がないから」と回答した人は全体の1.9%にすぎず、③「学校のことは、教員だけがやればよいと思うから」に至っては全体のわずか0.4%という結果であった。つまり、父親・母親・祖父・祖母という保護者集団は、どの続柄であっても、「面倒だから・関心がないから」という理由や「学校のことは、教員だけ

がやればよいと思うから」という理由で、学校支援ボランティアをおこなっていないのではないということがわかる。続いて、続柄別におこなったことがない理由を見ていくと、子どもに対する続柄によってその理由がさまざまであることがみてとれる。①「忙しくて時間がないから」と回答した人が占める割合は、父親では7割弱、母親と祖父ではおよそ5割ほどいるのに対して、祖母では3割弱と少ない。当然父親の多くは昼間は仕事があるのに対して、特に祖母は時間がないことを、おこなったことがない一番の理由にはしていない。このことは、④「自分にもできると思われるものがないから」を理由としている人は、父親ではわずか3.7%に過ぎないのに対して、祖母では16.0%いることから言えるであろう。一方、⑤「学校支援ボランティアのことがよくわからないから」と回答した人の割合は①「忙しくて時間がないから」という理由とは逆に近い表れ方を示している。父親では21.1%、母親では26.8%の割合で回答しているのに対して、祖父では3人に1人の35.7%、祖母においては

2人に1人に近い44.0%の人が⑤「学校支援ボランティアのことがよくわからない」ことを理由にしている。特に祖母においては、学校支援ボランティアをおこなったことのない理由の中でこれを選択している人の割合が最も

(2) 学校支援ボランティアに対する今後の意向

前項においては、学校支援ボランティア経験がない保護者集団に、その理由を問い、その現状について見てきた。ここでは、それらをふまえて、「今後、もし学校支援ボランティアをおこなうとしたら、どのような分野でおこなってみたいですか」という問いを発して、学校支援ボランティアに対しての今後の意向について見ていくこととする。

【グラフ3-2-1】は、【問1】において、学校支援ボランティアを「まったくおこなったことはない」と回答した人に対して「今後、もしおこなうとしたらどんな分野か」を問うた結果について続柄別に比較できる形で示したグラフである。この問いは、おこなってみたいものをいくつでも選んで回答してもらう形をとった。

まず、全体を見ていくこととする。回答の割合が多かったものから順に挙げてみると、最も多かったのが「登下校の安全への支援」(41.8%)であり、続いて多かった項目は、「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」(26.9%)である。そして、「クラブ活動・学校行事への支援」(26.1%)、「校外学習の引率などの支援」

(25.3%)までが、20%を超えた回答である。割合が一番多かったのが「登下校の安全への支援」であることから、参加しやすさだけでなく、子どもたちの安全・安心は、何を置いても最優先されるべき喫緊の課題であるという保護者集団の思いが表れていると考えられる。そして、「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」「クラブ活動・学校行事への支援」「校外学習の引率などの支援」などの子どもたちと直にふれあえる活動が上位にきていることも特徴的であると言えるだろう。一方で、割合が比較的少なかったのは「読み聞かせ・図書の修繕などの読書活動への支援」(12.9%)、「授業の教材作成などの支援」(12.4%)、「各教科・総合的な学習・道徳などの学習支援」(9.2%)などの項目で、ある程度専門的な知識や技能が必要であると思われる分野であった。また、「特にない・おこなうつもりがない」と回答した人は1割強にあたる11.2%であった。

次に、続柄別に見ていくと、母親・祖父・祖母は全体で見られた傾向と同様に、「登下校の安全への支援」と回答した人の割合が最も高い(母親47.7%・祖父64.3%

高く、広く周知し学校支援ボランティアのことがよくわかってくれば、行動を起こしてくれる可能性は最も高い集団と言えるかもしれない。

・祖母45.5%)。その中でも、特に祖父の回答の中で占める割合は、6割以上と圧倒的に高いのは着目すべき点であろう。その3者に対して、父親は「登下校の安全への支援」と回答した割合は31.7%で決して低くはないが、それ以上に「クラブ活動・学校行事への支援」と回答している父親が多くいた(38.5%)ことは特徴的と言えるだろう。これは、父親が自分の得意分野を学校で役立ててみたいという意識の表れと考えることもできよう。また、父親について言えば、他の3者に比べて「各教科・総合的な学習・道徳などの学習支援」(父親13.5%・母親8.3%・祖父0%・祖母0%)と「授業の教材作成などの支援」(父親17.3%・母親9.2%・祖父0%・祖母13.6%)の割合も高いのが特徴であり、このことから父親の前述の意識が推察される。更に、続柄別に2番目に回答の多かった項目を見てみると、父親は前述の通り「登下校の安全への支援」であったが、母親は「校外学習の引率などの支援」(36.7%)であった。この割合は、他の3者(父親18.3%、祖父7.1%、祖母13.6%)と比較しても非常に高く、母親が希望する学校支援ボランティアの分野として特徴的と言えるだろう。

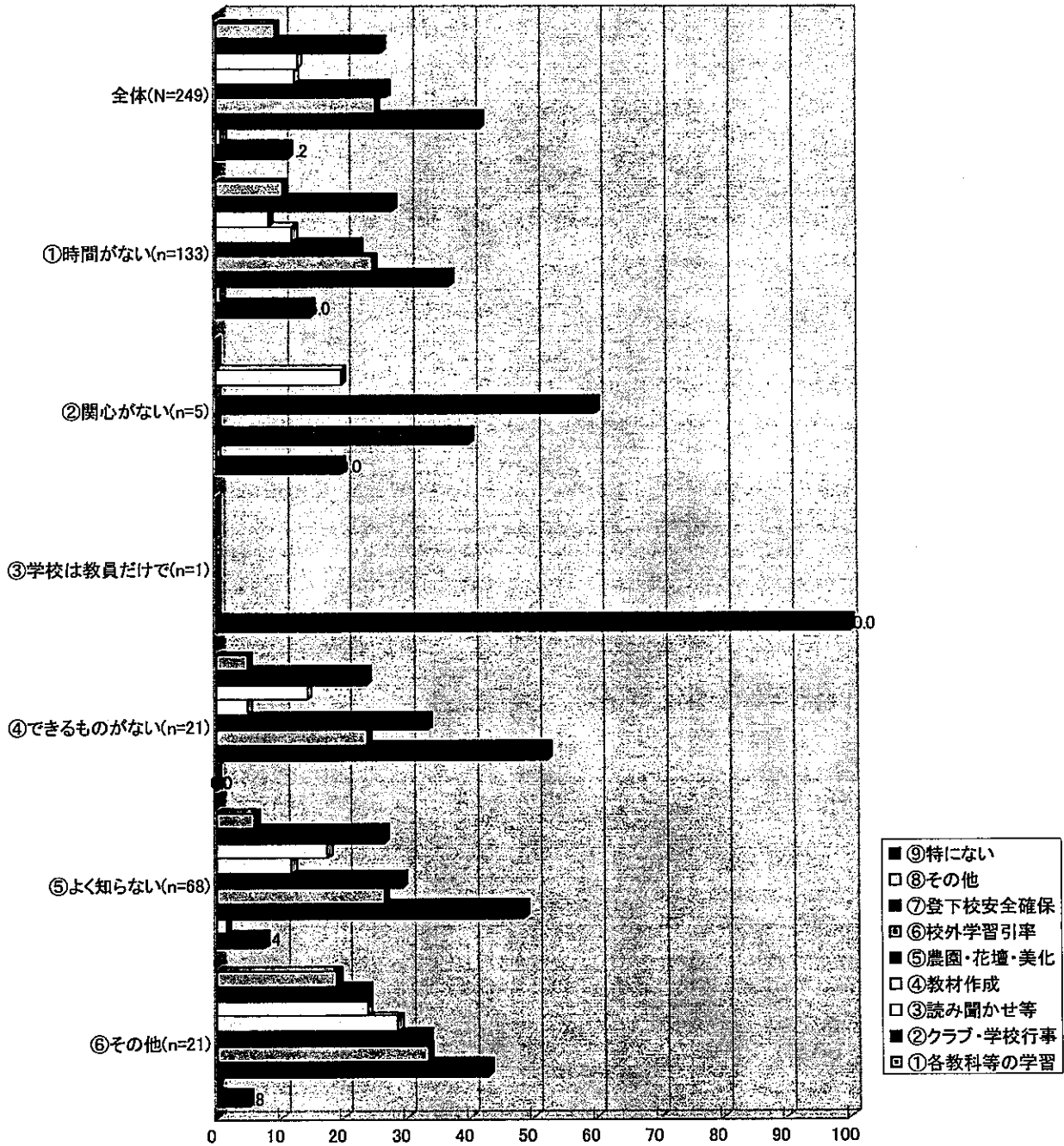
また、母親について言えば、他の分野でも回答の割合が20%を超えるとともに(「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」25.7%・「読み聞かせ・図書の修繕などの読書活動への支援」20.2%・「クラブ活動・学校行事への支援」20.2%)、「特にない・おこなうつもりがない」と回答した人の割合が最も低い(母親7.3%・父親14.4%・父と祖母については、ともに「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」と回答した人の割合(祖父21.4%・祖母40.9%)が「登下校の安全への支援」について高く、農園や花壇と言った自然とのふれあいや環境整備の面でボランティアをおこなってみたいという意識が強いのではないかと推察できる。

(3) 学校支援ボランティア経験のない理由と今後の意向のクロス集計

次に、「学校支援ボランティアをおこなったことがない理由は何か」(問2)と「今後、もし学校支援ボランティアをおこなうとしたら、どのような分野でおこなってみたいか」(問3)とのクロス集計の結果について見ていくこととする。

【グラフ3-3-1】

【問2】学校支援ボランティア経験のない理由
 ×【問3】学校支援ボランティアで活動してみたい分野



【グラフ3-3-1】がその結果を示しているグラフである。ここでは、学校支援ボランティアでおこないたい分野は「特にない」「おこなうつもりがない」と回答した人に着目してみたい。「学校支援ボランティア経験のない理由」として、⑤「学校支援ボランティアのことがよくわからないから」と回答した人の中で⑨「特にない・おこなうつもりがない」と回答した人はわずか7.4%、更に④「自分にもできると思われるものがないから」と回答した人に至っては学校支援ボランティアでおこないたい分野が⑨「特にない・おこなうつもりがない」と回答した人は21人中0人であった。これらの人たちは、「学校支援ボランティア経験のない理由」として、①「忙し

くて時間がないから」(15.0%)、②「面倒だから・関心がないから」(20.0%)や③「学校のことは、教員だけがやればよいと思うから」(100.0%)を挙げている人たちと比較すると、学校支援ボランティアでおこないたい分野は⑨「特にない・おこなうつもりがない」と回答する割合が明らかに低くなっている。

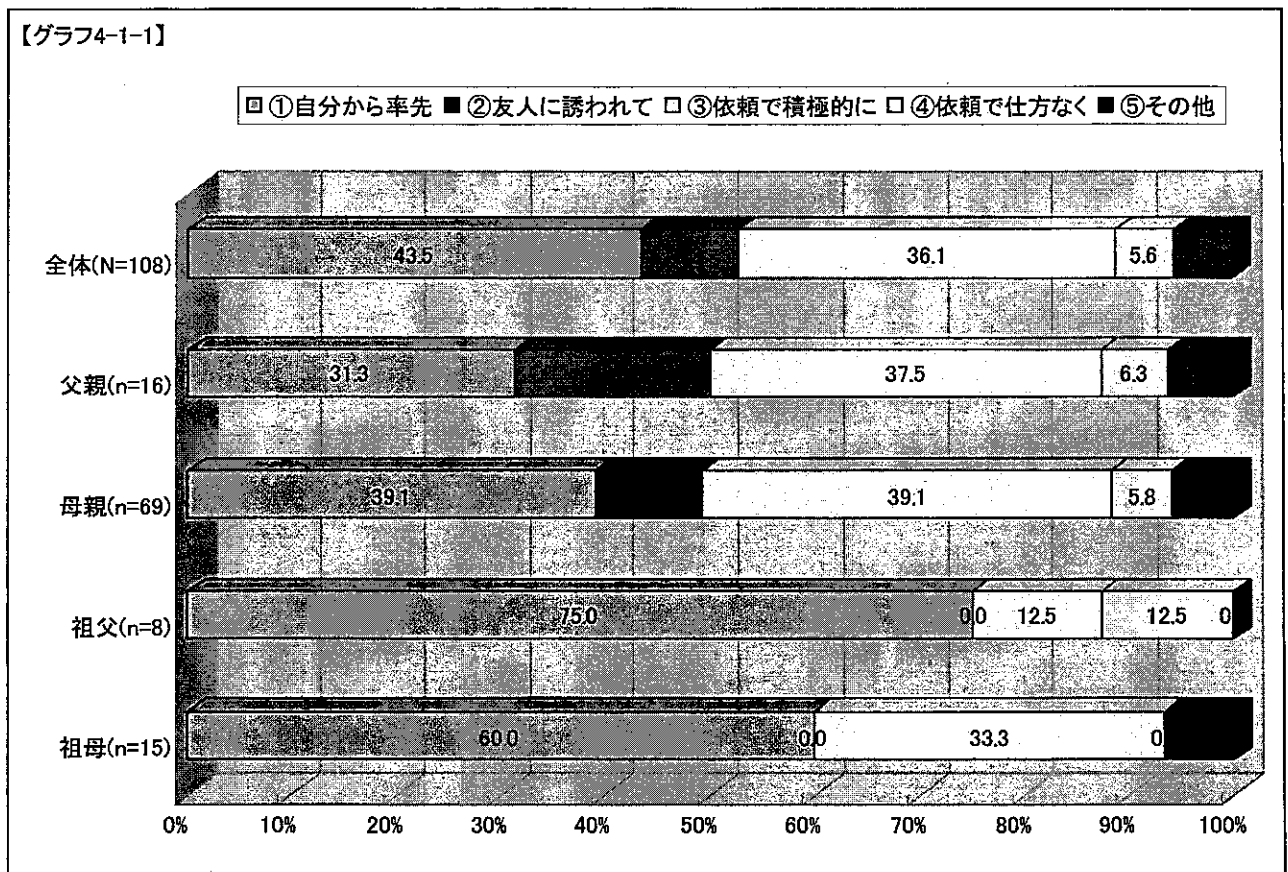
つまり、「学校支援ボランティア経験のない理由」として④「自分にもできると思われるものがないから」や⑤「学校支援ボランティアのことがよくわからないから」と回答した人たちは、きっかけさえあれば、ボランティアを行う意向があるのではないかと考えることができる。

4節 学校支援ボランティアをおこなった動機と活動分野

ここでは、【問1】の設問「あなたは、これまで、学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」の

問いに対して、②「1～2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人に「おこなおうとした動機・きっかけ」を問うた結果についてみていくとともに、どのような分野で活動したかについての実態も合わせてみていきたい。

(1) 学校支援ボランティアをおこなった動機



【グラフ4-1-1】は、(問1)において、これまで学校支援ボランティアを②「1～2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人

に対して、「おこなおうとした動機・きっかけ」を問うた結果を子どもに対する続柄別に比較できる形で示したものである。

まず、全体を見てみると、最も多いのが①「自分から率先して」と回答した人で43.5%、次いで③「学校から依頼があり積極的に」と回答した人で36.1%であり、①と③で全体の約8割を占める。そして、②「友人や知人に誘われて」と回答した人が9.3%で約1割、④「学校から頼まれたので仕方なく」は5.6%に過ぎなかった。この結果から、経験者の約8割は、かなり積極的な動機で学校支援ボランティアに取り組んだことがわかる。

次に、子どもに対する続柄別に見ていくと、まず目立つのが、祖父の9割弱(87.5%=①「自分から率先して」75.0%+③「学校から依頼があり積極的に」12.5%)、

(2) 学校支援ボランティアの活動分野

前項においては、学校支援ボランティア経験のある保護者集団に、その動機・きっかけを問うた結果について見てきた。ここでは、それらをふまえて、「どのような学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」という問いを発して、学校支援ボランティアとしての活動分野の現状について見ていくこととする。

【グラフ4-2-1】は、【問1】において、学校支援ボランティアを「1~2回おこなったことがある」「何回もおこなったことがある」と回答した人に対して「どのような分野でおこなったことがあるか」を問うた結果について続柄別に比較できる形で示したグラフである。この問いは、おこなった分野をいくつでも選んで回答してもらう形をとった。

まず、全体を見ていくこととする。回答の割合が多かったものから順に挙げてみると、最も多かったのが「登下校の安全への支援」(50.9%)、続いて「校外学習の引率などの支援」(47.2%)であり、これらは、経験者の2人に1人がおこなっている分野である。続いて多かった項目は、「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」(23.1%)、そして、「クラブ活動・学校行事への支援」(21.3%)となり、ここまでが、20%を超えた回答である。

割合が一番多かったのが「登下校の安全への支援」であることから、時間的に決まっているという取り組みやすさだけでなく、昨今の児童生徒に対する痛ましい事件の続発により、子どもたちの安全・安心は時代の要請であると同時に、何を置いても最優先されるべき喫緊の課題であるという保護者集団の思いが表れていると考えられる。そして、「校外学習の引率などの支援」「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」「クラブ活動・学校行事への支援」などの子どもたちと直にふれあえ

祖母の9割強(93.3%=①「自分から率先して」60.0%+③「学校から依頼があり積極的に」33.3%)が、積極的な動機で学校支援ボランティアをおこなっているということである。特に①「自分から率先して」の割合(祖父75.0%、祖母60.0%)は、母親の39.1%、父親の31.3%と比べても、かなり高い割合になっている。また、②「友人や知人に誘われて」の割合が、父親の18.8%、母親の10.1%と比べ、祖父・祖母ともに0%であることから、祖父・祖母は、かなり自発的な動機で学校支援ボランティアをおこなっているのではないかという意識が浮かび上がってくる。

る活動が上位にきていることも特徴的であると言えるだろう。

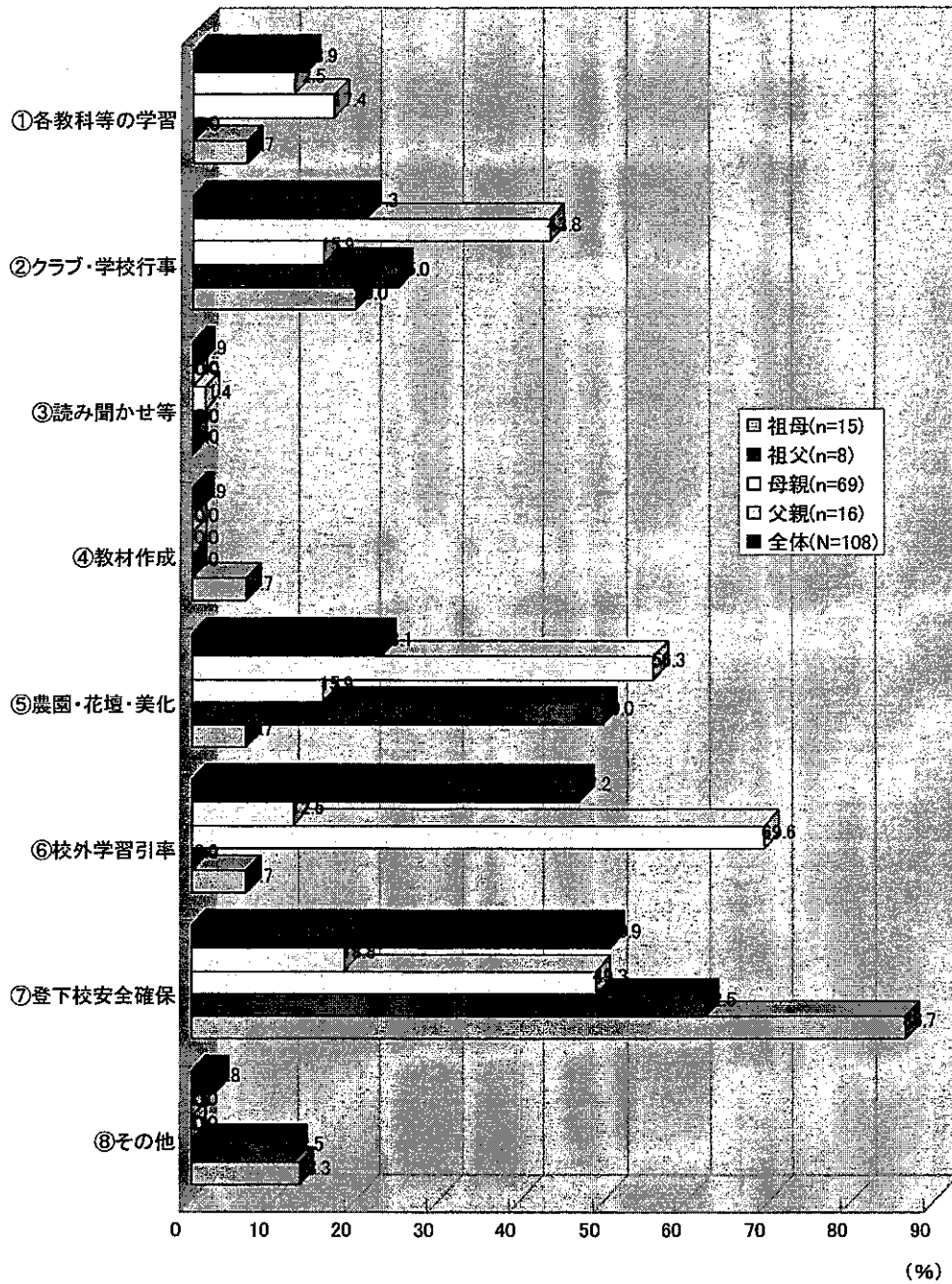
一方で、割合が比較的少なかったのは「各教科・総合的な学習・道徳などの学習支援」(13.9%)で、ある程度専門的な知識や技能が必要であると思われる分野であった。また、「読み聞かせ・図書の修繕などの読書活動への支援」と「授業の教材作成などの支援」は、わずかに0.9%であった。このうち「読み聞かせ」については、保護者集団(父親・母親・祖父・祖母)以外の地域の人々が定期的に行っているが、その範囲を保護者集団にも広げていけると、もっと活動は盛んになると考えられる。また、「図書の修繕」「授業の教材作成などの支援」については、まだまだこれから学校支援ボランティアを募っていく必要がある分野であると言える。

次に、続柄別に見ていくと、祖父・祖母は全体で見られた傾向と同様に、「登下校の安全への支援」と回答した人の割合が最も高い(祖父62.5%・祖母86.7%)。その中でも、特に祖母の回答の中で占める割合は、8割以上と圧倒的に高いのは着目すべき点であろう。母親は、「登下校の安全への支援」も49.3%と高いが、最も多いのは「校外学習の引率などの支援」で約7割(69.6%)の母親がおこなっていることがわかる。

上記の3者に対して、父親は「登下校の安全への支援」と回答した割合は18.8%に過ぎず、最も多いのは「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」(56.3%)、続いて「クラブ活動・学校行事への支援」(43.8%)と回答していることは特徴的と言えるだろう。これは、父親が自分の得意分野を学校で役立てているというように考えられる。また、「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」について言えば、祖父の中での割合も50.0%と高く、父親と同様に、自分の得意分野を学校で役立てることが多いのではないかと考えられる。

【グラフ4-2-1】

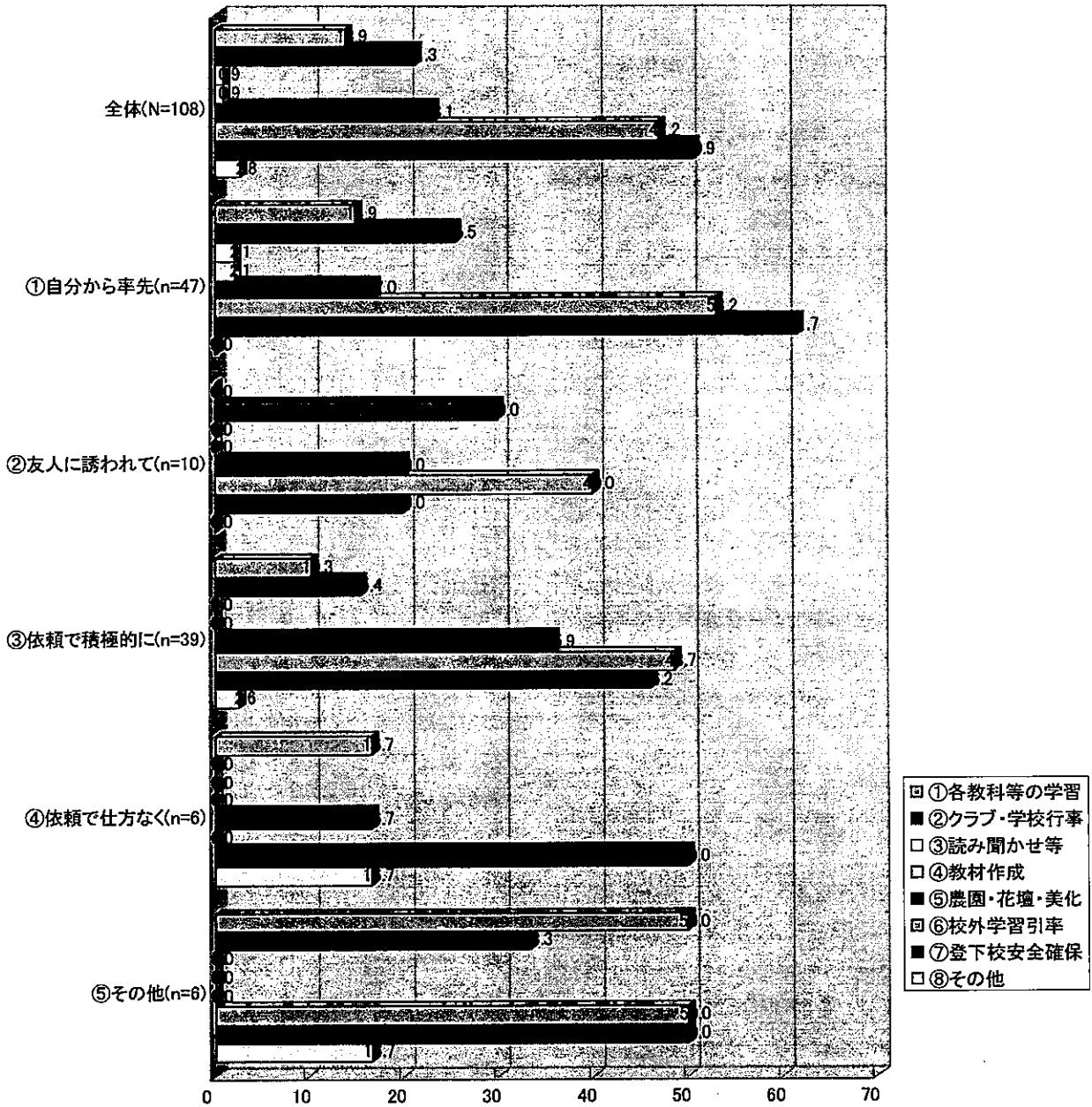
【問5】学校支援ボランティアの活動分野



(3) 学校支援ボランティアをおこなった動機と活動分野のクロス集計

【グラフ4-3-1】

【問4】学校支援ボランティアをおこなった動機 × 【問5】学校支援ボランティアの活動分野



次に、「学校支援ボランティアをおこなおうとした動機・きっかけは何か」(問4)と「どのような分野で学校支援ボランティアをおこなったか」(問5)とのクロス集計の結果について見ていくこととする。

【グラフ4-3-1】がその結果を示しているグラフである。まず目に付くのは、学校支援ボランティアをおこなおうとした動機として、①「自分から率先して」と回答した人の実に6割以上(61.7%)が「登下校の安全への支援」をおこなっているという点である。前述したとおり、取り組みやすさとともに子どもたちの安全を守ろうとする意識の強さが「自分から率先して」おこなうという行動に繋がっていったものと考えられる。ただし、④「学校から頼まれたので仕方なく」おこなった人の半数(50.0%)を占めていることも併記しておく。

次に特徴的なことは、②「友人や知人に誘われて」と

5節 学校支援ボランティア経験による自分への影響や自己の変容

ここでは、【問1】の設問「あなたは、これまで、学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」の問いに対して、②「1~2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人に【問6】「ご自身にはどのような影響や変化がありましたか」と問うた結果について見ていくとともに、「おこなおうとした動機きっかけ」や「活動分野」とのクロス集計をおこない、様々な角度から学校支援ボランティアの実態を見ていきたい。

(1) 学校支援ボランティア経験による自分への影響や自己の変容

【グラフ5-1-1】は、学校支援ボランティアに対して「多少の経験有り」「ある程度継続して経験有り」の保護者集団に対して、ボランティアをおこなったことによる「自分への影響や自己の変容」を問うた結果(複数回答)を子どもに対する続柄別に比較できる形で示したものである。

まず、全体を見てみると、7割以上(73.1%)の人が①「学校や子どもたちのことが、わかるようになった」と回答し、次いで6割以上(63.0%)の人が③「自分の子(孫)だけでなく、他の方の子(孫)にも、目が向くようになった」と回答している。今回設定した8つの選択肢の中では、この2つが群を抜いて高い割合を示している。以下、割合が高い順に、②「自分の子(孫)のことが、よ

回答した人の4割(40.0%)が「校外学習の引率などの支援」をおこなった人が占めているという点である。この分野は、母親の活動が中心だったことから、母親同士がお互いに情報交換し合ったり、誘い合ったりしている結果と見ることができる。同様に③「学校から依頼があり積極的に」と回答した人の5割弱(48.7%)が、「校外学習の引率などの支援」をおこなっているが、これは昼間仕事を持っていない母親が、学校からの依頼の通知を見て協力した結果とすることができる。

もう一つ特徴的なこととして、②「友人や知人に誘われて」と回答した人の3割(30.0%)が、「クラブ活動・学校行事への支援」をおこなっているという点が挙げられる。これはどちらかと言えば趣味・特技にも関わる分野なので、同じ趣味・特技を持つ仲間から声をかけられた結果ではないかと推測できる。

りわかるようになった」が3割強(31.5%)、④「新しい仲間と出会ったり交流が生まれたりした」が2割以上(25.9%)、⑦「もっと学校や子どもたちと関わりたいと思うようになった」(15.7%)、⑤「自分の気持ちに張りができた」(11.1%)、⑥「自ら学ぶ意欲が向上した」(6.5%)という結果になった。

次に、子どもに対する続柄別に見ていくと、父親・母親・祖父の3者は、全体の傾向と同様に、①「学校や子どもたちのことが、わかるようになった」と回答した人が最も多く、次いで③「自分の子(孫)だけでなく、他の方の子(孫)にも、目が向くようになった」が2番目に続くが、祖母だけは①と③が逆になっており、しかも③「自分の子(孫)だけでなく、他の方の子(孫)にも、目が向くようになった」と回答した人の割合が93.3%と、極めて高い数値を示している。これは、日頃から祖母は家庭で孫の世話をよくしており、ある意味では自分の孫しか見えていない傾向にあったものが、学校支援ボランティアを経験することによって視野が広がり、「他の子(孫)にも目が向くようになった」と言えるかもしれない。また、②「自分の子(孫)のことが、よりわかるようになった」と回答した割合も、祖母が最も高く(60.0%)、これは家庭での様子とは異なる孫の一面にふれることができたためと考えられる。

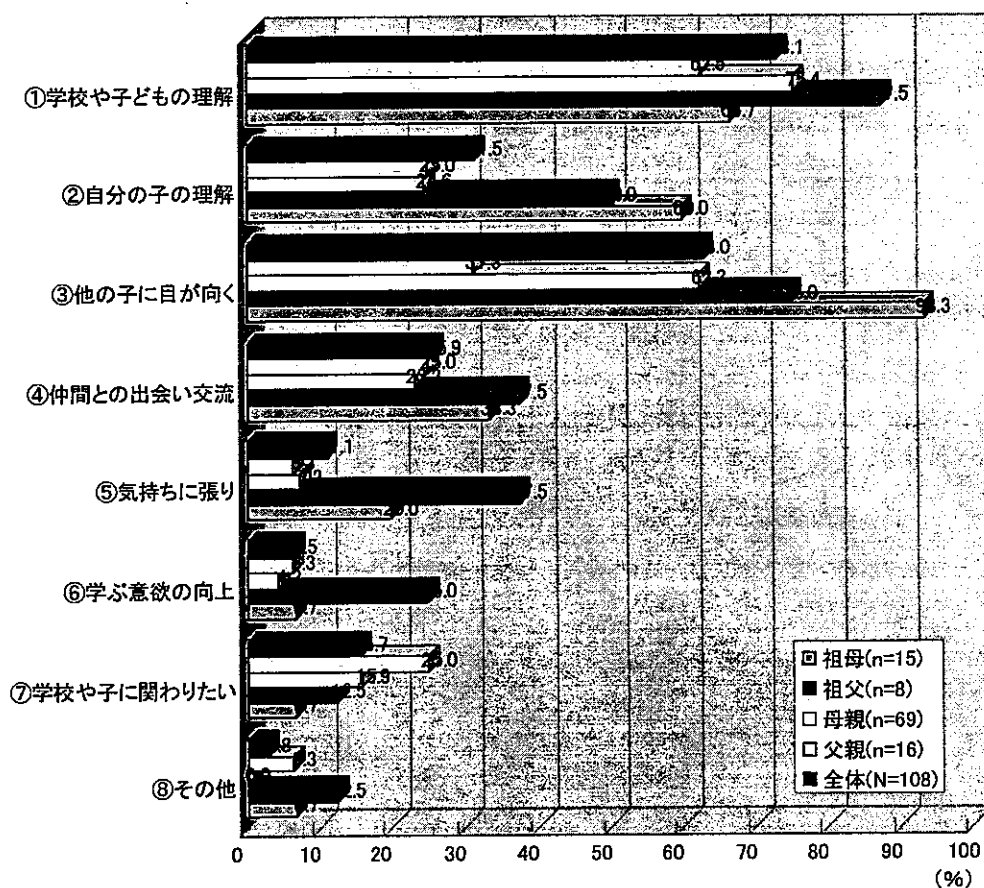
それに対して、前述のように、父親・母親・祖父の3者は、①「学校や子どもたちのことが、わかるようになった」と回答した人が最も多かったことは共通しているが、更に細かく見ていくと、父親→母親→祖父といくに従っ

て、①「学校や子どもたちのことが、わかるようになった」割合（62.5%→75.4%→87.5%）も、③「自分の子（孫）だけでなく、他の方の子（孫）にも、目が向くようになった」割合（31.3%→62.3%→75.0%）も、かなり増加していくことに気付く。このことは、父親よりも母親、更には祖父の方が学校支援ボランティアを経験したことによる自分への影響や自己の変容が、かなり大きいということを表しているとも考えられる。

上記以外では、父親の⑦「もっと学校や子どもたちと関わりたいと思うようになった」と回答した人の割合（25.0%）が他の3者（母親15.9%・祖父12.5%・祖母6.7%）に比べて高いこと、祖父の④「新しい仲間と出会ったり交流が生まれたりした」（37.5%）、⑤「自分の気持ちに張りができた」（37.5%）、⑥「自ら学ぶ意欲が向上した」（25.0%）と回答した人の割合が他の3者に比べて高いことも特徴と言えよう。

【グラフ5-1-1】

【問6】学校支援ボランティア経験による自分への影響や自己の変容



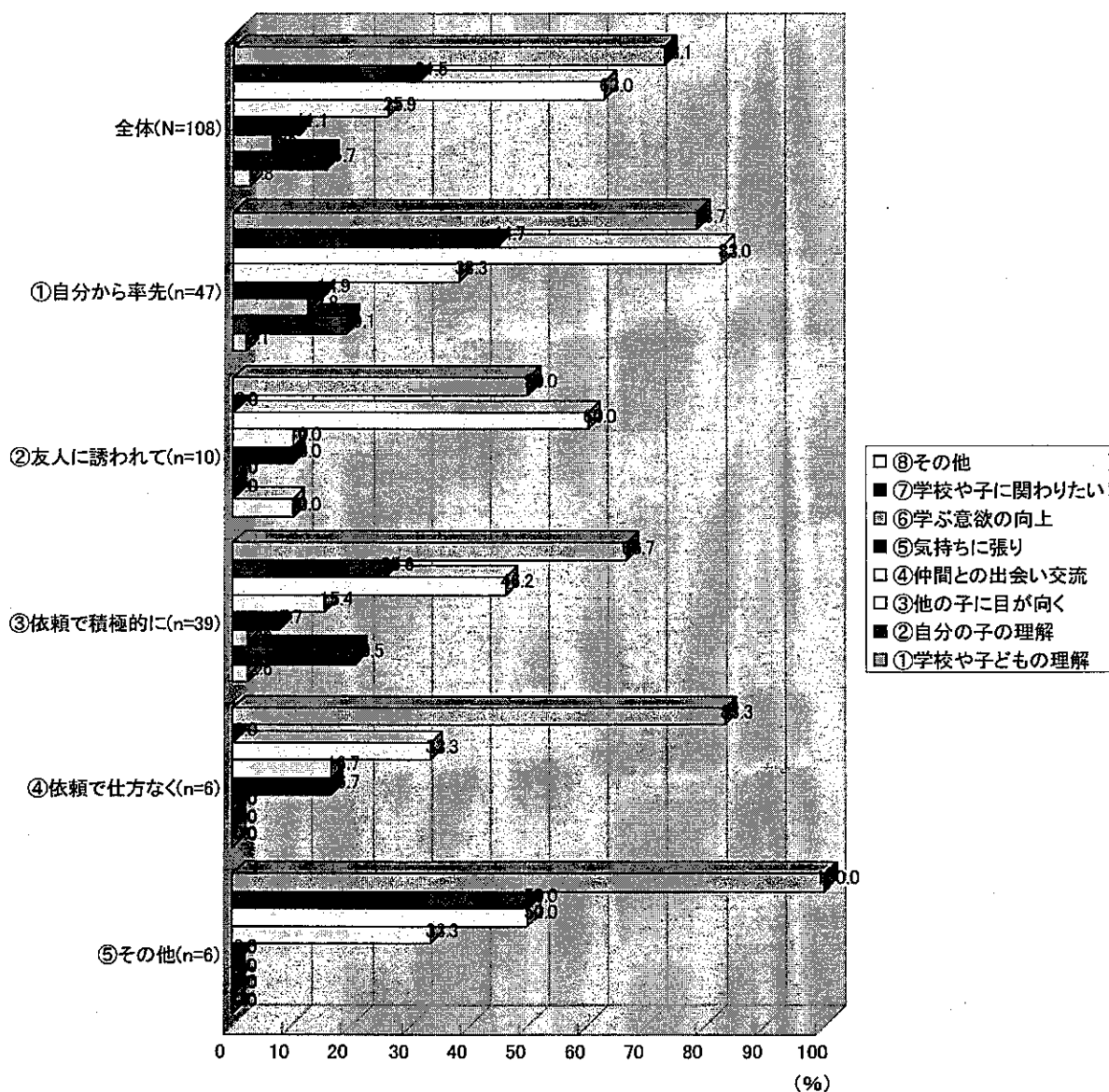
(2) 学校支援ボランティアをおこなった動機と自分への影響のクロス集計

次に、「学校支援ボランティアをおこなおうとし

た動機・きっかけ」（問4）と「自分への影響や自己の変容」（問6）とのクロス集計の結果について見ていくこととする。

【グラフ5-2-1】

【問4】学校支援ボランティアをおこなった動機 × 【問6】自分への影響や自己の変容



【グラフ5-2-1】がその結果を示している表である。
まず第一に言えることは、学校支援ボランティアをおこ

なおうとした動機として「自分から率先して」と回答した人は、他の3つの動機の回答者（「友人や知人に誘わ

れて」「学校から依頼があり積極的に」「学校から頼まれたので仕方なく」と比べ、自分への影響や自己の変容がほとんどの項目で高いということである。細かく見ていくと、②「自分の子(孫)のことが、よりわかるようになった」(44.7%)、③「自分の子(孫)だけでなく、他の方の子(孫)にも、目が向くようになった」(83.0%)、④「新しい仲間と出会ったり交流が生まれたりした」(38.3%)、⑥「自ら学ぶ意欲が向上した」(12.8%)と回答した人の割合は、他の3つの動機の回答者よりもすべて高くなっている。また、残りの①「学校や子どもたちのことが、わかるようになった」(78.7%)、⑤「自分の気持ちに張りができた」(14.9%)、⑦「もっと学校や子どもたちと関わりたいと思うようになった」(19.1%)と回答した人の割合も、すべて2番目に高くなっている。

次に特徴的なことは、学校支援ボランティアをおこなおうとした動機として「友人や知人に誘われて」または「学校から頼まれたので仕方なく」と回答した人は、自分への影響や自己の変容として②「自分の子(孫)のことが、よりわかるようになった」⑥「自ら学ぶ意欲が向上

【グラフ5-3-1】がその結果を示しているグラフである。なお、ここでは「読み聞かせ・図書の修繕などの読書活動への支援」と「授業の教材作成などの支援」の経験者は各1名であり、その1名が選択した項目は100%、選択していない項目は0%となっているため、この2つの分野はこの項の分析からは省いて考えることとした。

まず第一に言えることは、どの分野の経験者でも「自分への影響や自己の変容」として①「学校や子どもたちのことが、わかるようになった」と回答した人の割合が最も高いということである。特に「各教科・総合的な学習・道徳などの学習支援」経験者では9割以上(93.3%)、「校外学習の引率などの支援」や「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」経験者では8割以上の人が回答している。やはり、どの分野の学校支援ボランティアをおこなっても、これまでよりも「学校や子どもたちのことが、わかるようになる」ことが、改めて明らかになったと言える。

第二に言えることは、同様にどの分野の経験者でも③「自分の子(孫)だけでなく、他の方の子(孫)にも、目が向くようになった」と回答した人の割合が2番目に高いということである。学校支援ボランティアを経験することによって、これまでより「他の子にも目が向くようになる」ということは、学校支援ボランティアをおこなうことの意義として、非常に重要な側面であると考えられ

した」⑦「もっと学校や子どもたちと関わりたいと思うようになった」を選択した人は0%だったということである。それに対して、動機として「自分から率先して」または「学校から依頼があり積極的に」を挙げた人の回答では0%という項目は1つもない。

つまり、「友人や知人に誘われて」や「学校から頼まれたので仕方なく」というようなどちらかと言えば消極的な動機で学校支援ボランティアをおこなった人に比べ、「自分から率先して」と「学校から依頼があり積極的に」というような自発的・積極的な動機で学校支援ボランティアをおこなった人のほうが、自分に与えたよい影響・前向きな変容が、より大きいのではないかと結論づけることができる。

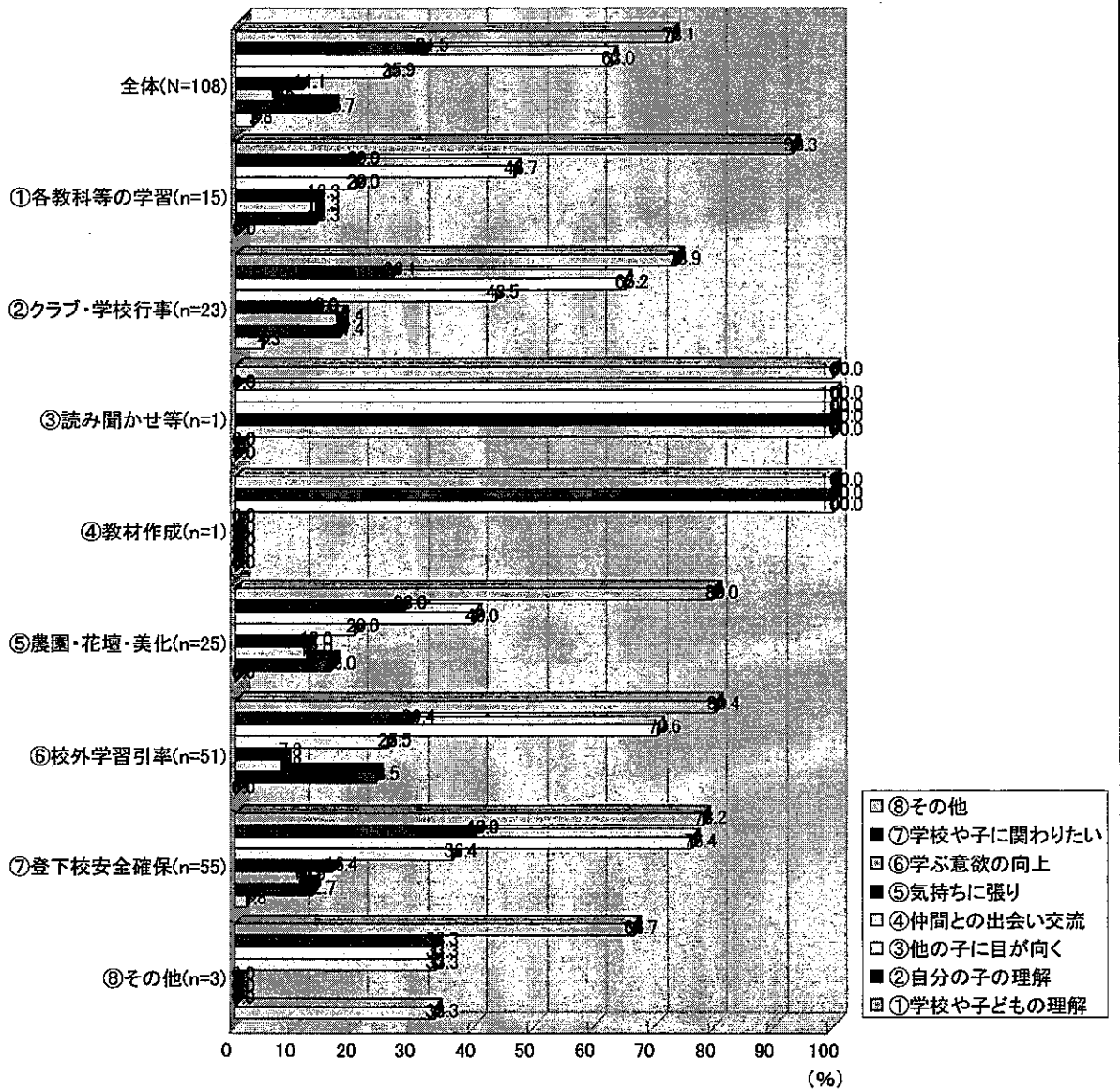
(3) 学校支援ボランティアの活動分野と自分への影響のクロス集計

次に、「学校支援ボランティアをおこなった分野」(問5)と「自分への影響や自己の変容」(問6)とのクロス集計の結果について見ていくこととする。

特に高い割合を示しているのは、7割を超えている「登下校の安全への支援」経験者(76.4%)と「校外学習の引率などの支援」経験者(70.6%)である。更に、上記2つの分野について見てみると、「登下校の安全への支援」をおこなった人は、②「自分の子(孫)のことが、よりわかるようになった」と回答した人の割合が40.0%と他の分野よりも高くなっており、これは週に何度も下校班に付き添うことによって家庭とは違った我が子(孫)の一面を見ることができたためと考えられる。また、「校外学習の引率などの支援」をおこなった人は、⑦「もっと学校や子どもたちと関わりたいと思うようになった」と回答した人の割合が23.5%と、これも他の分野の経験者よりも高くなっており、これは、ある程度の時間、一定の子どもたちと行動を共にすることによって深く交わることができ、その体験が「もっと学校や子どもたちと関わりたい」という思いに繋がっていったのではないかと考えられる。また、その他の特徴としては、「クラブ活動・学校行事への支援」をおこなった人は、④「新しい仲間と出会ったり交流が生まれたりした」と回答した人の割合が43.5%と、これも他の分野の経験者よりも高くなっている。これは、自分の特技・趣味等を生かせる学校支援ボランティアをおこなったことにより、それを通じた「新しい仲間」との「出会い」や「交流」が生まれたりしたのではないかと推察できる。

【グラフ5-3-1】

【問5】学校支援ボランティアの活動分野×【問6】自分への影響や自己の変容



6節 学校支援ボランティア経験者の今後の活動への意向

ここでは、【問1】の設問「あなたは、これまで、学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」の問いに対して、②「1～2回おこなったことがある」、

③「何回もおこなったことがある」と回答した人に【問7】「今後も引き続き、学校支援ボランティアをおこな

うとしたら、どのような分野でおこなってみたいですか」と問うた結果について見ていくとともに、「これまでの活動分野」や「自分への影響や自己の変容」とのクロス集計をおこない、様々な角度から、学校支援ボランティア経験者の今後の活動への意向を見ていきたい。

(1) 学校支援ボランティア経験者の今後の活動への意向

【グラフ6-1-1】は、学校支援ボランティアに対して「多少の経験有り」「ある程度継続して経験有り」の保護者集団に対して、「今後の学校支援ボランティア活動に対する意向」を問うた結果（複数回答）を子どもに対する続柄別に比較できる形で示したものである。

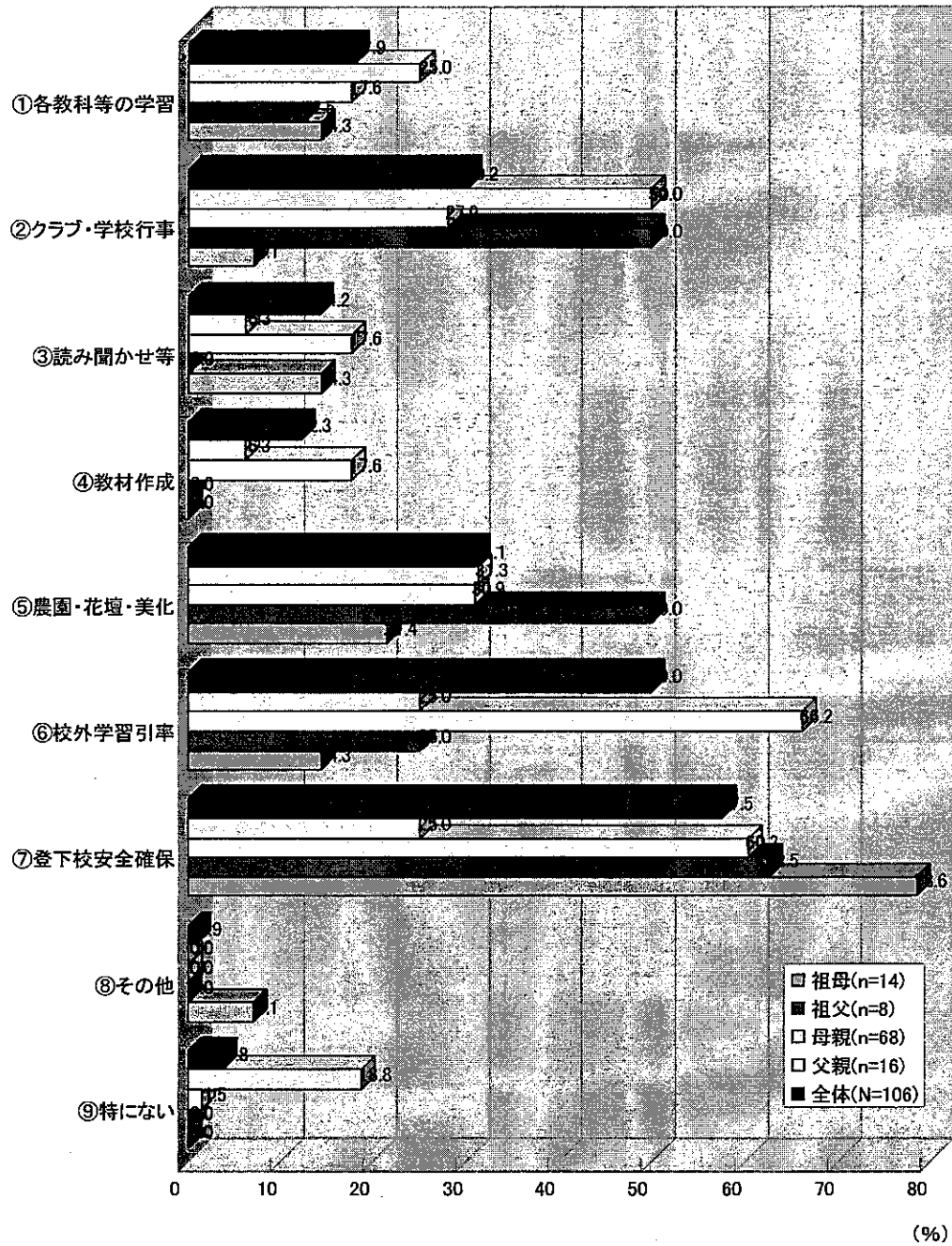
まず全体を見てみると、⑨「特にない・おこなうつもりがない」と回答した人は、わずかに3.8%であることから、学校支援ボランティア経験者の大部分は、今後も継続してボランティアをおこなう意向であることがわかる。中でも、⑦「登下校の安全への支援」（57.5%）と⑥「校外学習の引率などの支援」（50.0%）の2つの分野は、引き続き活動への意欲が高い。子どもたちの安全・安心に対する保護者集団の思いがここにも表れていると考えられる。

また続柄別では、父親は他の3者と比べ、①「各教科・総合的な学習・道徳などの学習支援」（父親25.0%・母親17.6%・祖父12.5%・祖母14.3%）と②「クラブ活動・学校行事への支援」（父親50.0%・母親27.9%・祖父50.0%・祖母7.1%）に対する意欲が高いという傾向

が見られた。これは、父親が自分の得意とする分野や専門分野を、学校や子どもたちのために生かしたいと考えているのではないかと推察される。一方、母親は、他の3者と比べ、⑥「校外学習の引率などの支援」（父親25.0%・母親66.2%・祖父25.0%・祖母14.3%）に対する意欲が圧倒的に高いのが特徴と言える。昼間の授業中の時間帯に、ある程度協力できる時間的余裕のある母親にとっては、子どもたちと一定時間行動を共にできる⑥「校外学習の引率などの支援」は魅力的に映るのかもしれない。続いて、祖父は、他の3者と比べ、⑤「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」（父親31.3%・母親30.9%・祖父50.0%・祖母21.4%）に対する意欲が高いことが特徴と言える。自然とふれあったり植物を育てたりする活動が祖父の最も好む活動と言えるかもしれない。最後に、祖母は、他のどの続柄よりも⑦「登下校の安全への支援」（父親25.0%・母親60.3%・祖父62.5%・祖母78.6%）に対する意欲が高いという結果が得られた。祖母の希望の中で2番目に高いのが21.4%（⑤「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」）であることを考えると、これは大きな特徴であると言える。

【グラフ6-1-1】

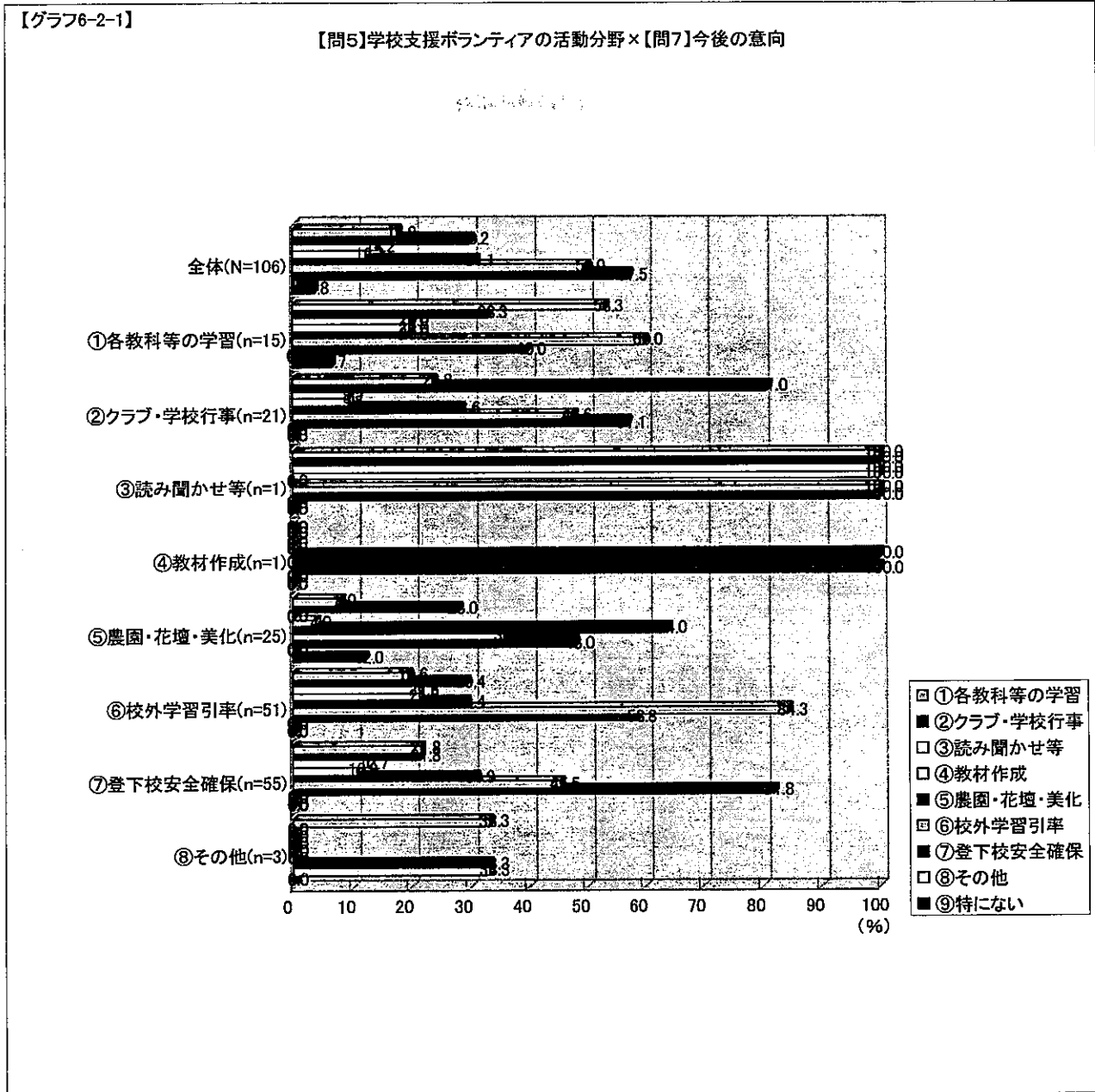
【問7】学校支援ボランティア経験者の今後の活動への意向



(2) 学校支援ボランティアの活動分野と今後の意向のクロス集計

次に、「学校支援ボランティアとしてのこれまでの活動分野」(問5)と「今後の活動に対する意向」(問7)

のクロス集計の結果について見ていくこととする。



【グラフ6-2-1】がその結果を示しているグラフである。まず概観してみると、これまで活動してきた分野については、最も高い割合で引き続きおこないたいと希望しているということがわかる。学校支援ボランティアの活動分野の選択肢として今回設けた7つの分野のうち、5つの分野についてそのことが言える。具体的に見ていくと、「クラブ活動・学校行事への支援」を引き続きおこないたい人は81.0%、「読み聞かせ・図書の修繕などの読書活動への支援」を引き続きおこないたい人は100.0%、(3) 学校支援ボランティア経験による自分への影響と今後の意向のクロス集計

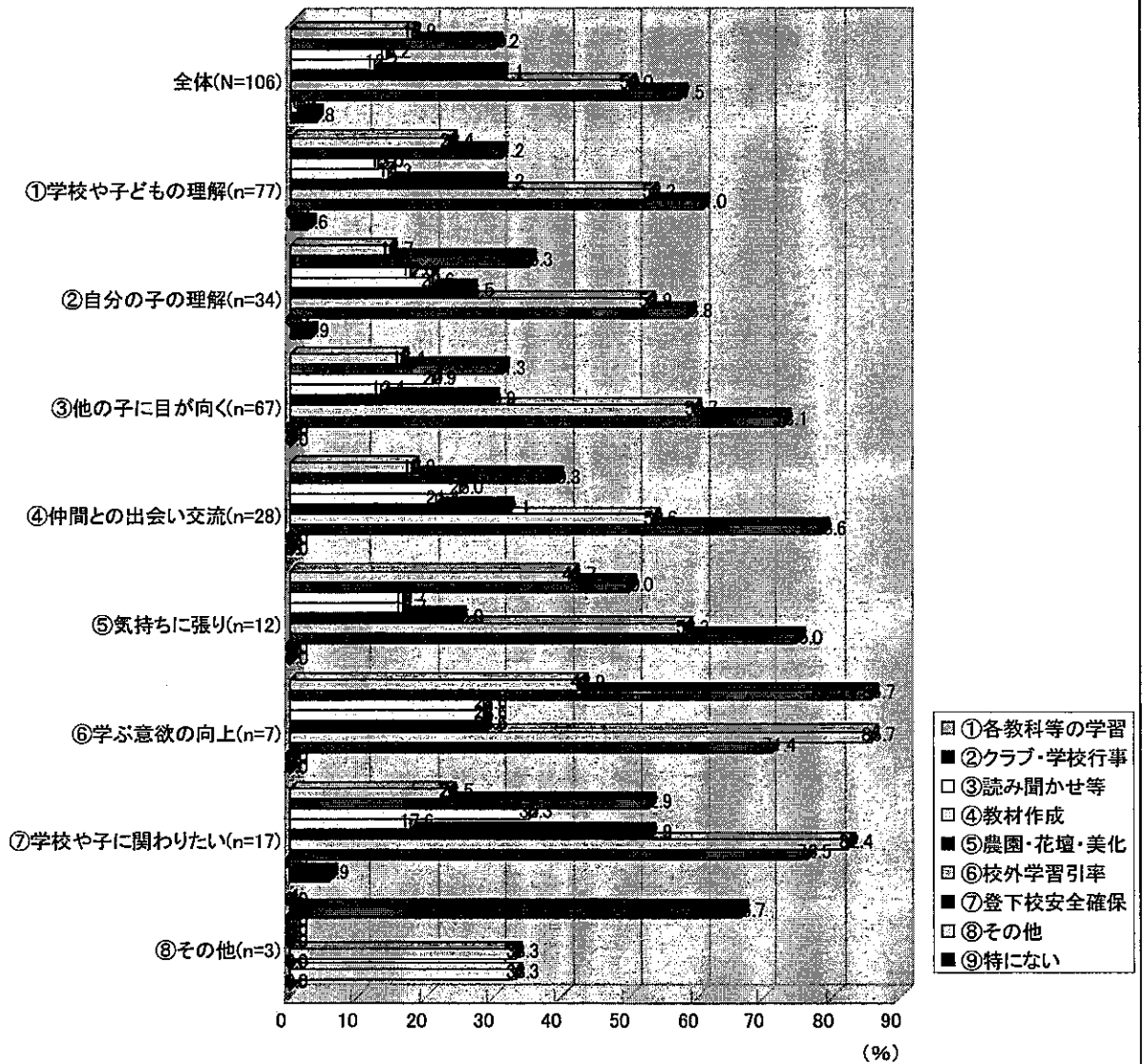
ここでは、「学校支援ボランティア経験による自分へ

「農園活動・花壇の整備・校庭の美化などの支援」を引き続きおこないたい人は64.0%、「校外学習の引率などの支援」を引き続きおこないたい人は84.3%、「登下校の安全への支援」を引き続きおこないたい人は81.8%と、それぞれの中で今後活動したい分野としては最も高い割合を示している。つまり、これまで活動してきた分野は、引き続き活動していきたいという意向が強く表れているということが言える。

の影響や自己の変容」(問6)と「今後の活動に対する意向」(問7)のクロス集計の結果について見ていくこととする。

【グラフ6-3-1】

【問6】学校支援ボランティア経験による自分への影響×【問7】今後の意向



【グラフ6-3-1】がその結果を示しているグラフである。まず、「自分への影響や自己の変容」の中のどの項目を

回答した人でも共通して言えることは、「今後の活動の意向」として、「登下校の安全への支援」が高い割合を

示しているということである。「登下校の安全への支援」をおこなった人は、特に祖父の中の62.5%、祖母の中の86.7%を占めていたことは第4節第2項で述べた通りであるが、ここで④「新しい仲間と出会ったり交流が生まれたりした」人の78.6%、⑤「自分の気持ちに張りができた」人の75.0%が「登下校の安全への支援」を希望していることから、この活動は、特に祖母・祖父が意欲を示していると推定される。

また、「校外学習の引率などの支援」も「登下校の安全への支援」に次いで高い割合を示している。ここでは特に、⑥「自ら学ぶ意欲が向上した」人の85.7%、⑦「もっと学校や子どもたちと関わりたいと思うようになった」人の82.4%が「校外学習の引率などの支援」に意欲を示していることが大きな特徴と言えよう。「自ら学ぶ意欲が向上した」人たちは、子どもたちと共に校外学習

7節 学校支援ボランティア経験の有無と家庭教育の意識との関係

ここでは、【問1】の「あなたは、これまで、学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」という設問に対して、それぞれ①「まったくおこなったことはない」、②「1～2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人が、【問9】ア～カの「ご家庭でのあなたは、4～1のどこにあてはまるとお考えですか」という設問で、4（よくあてはまる）・3（どちらかといえばあてはまる）・2（どちら

(1) 学校支援ボランティア経験の有無と家庭教育の意識との関係

【グラフ7-1-1】は、【問1】の「あなたは、これまで学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」という設問に対して、それぞれ①「まったくおこなったことはない」、②「1～2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人が、【問9.ア】「子ども(孫)の気持ちをよく理解している」で、4（よくあてはまる）・3（どちらかといえばあてはまる）・2（どちらかといえばあてはまらない）・1（あまりあてはまらない）のいずれを選択しているかをクロス集計してみた結果を示しているグラフである。

まず、グラフを見て明らかなのは、4（よくあてはまる）と回答した人の割合が、学校支援ボランティアを「ま

へ出て、その中で自分の学習した知識を子どもたちに伝えていきたいという気持ちを持っているのではないかと推測できる。

その他に顕著であった点は、⑥「自ら学ぶ意欲が向上した」人の8割以上（85.7%）と⑤「自分の気持ちに張りができた」人の5割（50.0%）が自分の特技や趣味等を生かせる「クラブ活動・学校行事への支援」を希望している点、同じく⑥「自ら学ぶ意欲が向上した」人の4割以上（42.9%）と⑤「自分の気持ちに張りができた」人の4割以上（41.7%）が自分の専門的知識を生かせる「各教科・総合的な学習・道徳などの学習支援」を希望している点、⑦「もっと学校や子どもたちと関わりたいと思うようになった」人の3割以上（35.3%）が定期的に子どもたちと間近でふれあえる「読み聞かせ・図書の修繕などの読書活動への支援」を希望している点である。

かといえあてはまらない）・1（あまりあてはまらない）のいずれを選択しているかをクロス集計してみた。

具体的には、学校支援ボランティアの経験が家庭教育にどのような効果をもたらすのか、その効果の一端を検証するために、【問9】で、ア（共感）・イ（理解）・ウ（対話）・エ（共遊）・オ（食事）・カ（賞賛）・キ（厳しさ）・ク（ルール）・ケ（自立）・コ（相談相手）という10の指標を仮に設けて、学校支援ボランティアを「全くの未経験」の人と「多少の経験がある」人と「ある程度継続して経験のある」人で、現在の自分自身の家庭教育の意識にどのような差異が表れるのかを明らかにしたいと考えたものである。

まったくおこなったことはない」人が20.7%であるのに対して、「1～2回おこなったことがある」人では27.9%、更に「何回もおこなったことがある」人では30.0%と増加してきているという点である。また、1（あまりあてはまらない）と2（どちらかといえばあてはまらない）を合わせた割合は、学校支援ボランティアを「まったくおこなったことはない」人は14.5%であるのに対して、「1～2回おこなったことがある」人では4.4%、「何回もおこなったことがある」では7.5%に過ぎない。

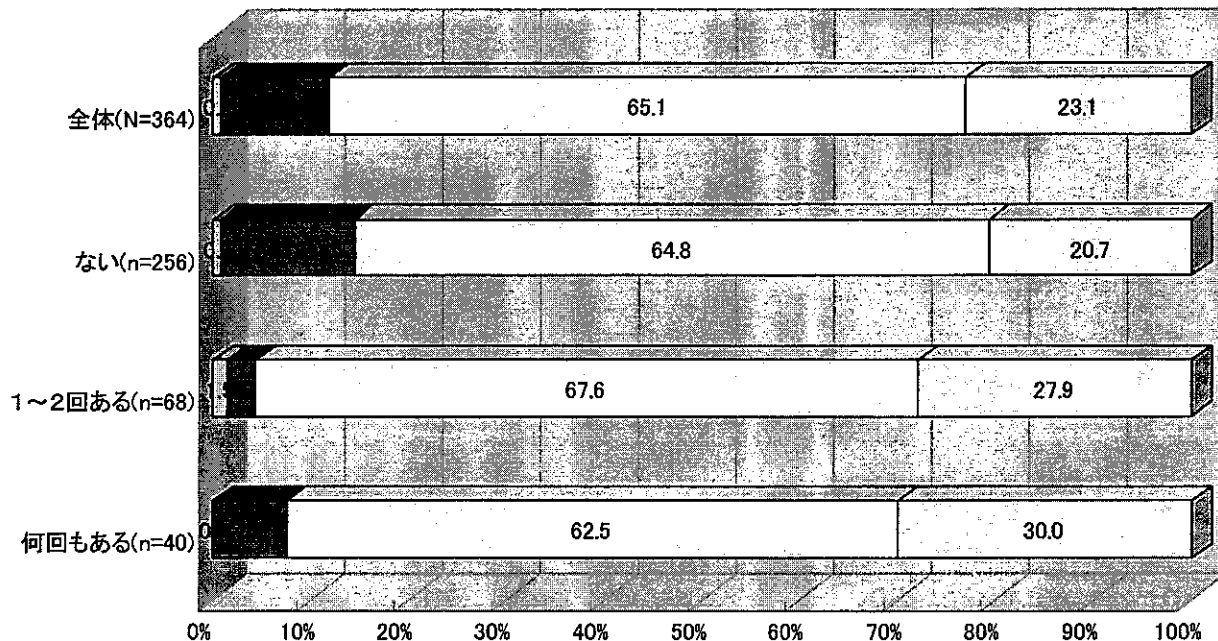
これらのことから、学校支援ボランティアを「全くの未経験」の人よりも、「多少の経験がある」人や「ある程度継続して経験のある」人の方が、家庭では子ども(孫)の気持ちをよく理解している人が多いのではないかと断言できよう。

【グラフ7-1-1】

【問9. ア】子ども(孫)の気持ちをよく理解している

■ 1(あまりあてはまらない) ■ 2(どちらかといえばあてはまらない) □ 3(どちらかといえばあてはまる) □ 4(よくあてはまる)

【問1】学校支援ボランティア経験の有無



【グラフ7-1-2】は、【問1】の「あなたは、これまで学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」という設問に対して、それぞれ①「まったくおこなったことはない」、②「1~2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人が、【問9. イ】「子ども(孫)の長所をよくわかっている」で、4(よくあてはまる)・3(どちらかといえばあてはまる)・2(どちらかといえばあてはまらない)・1(あまりあてはまらない)のいずれを選択しているかをクロス集計してみた結果を示しているグラフである。

まず、グラフを見て明らかなのは、4(よくあてはまる)と回答した人の割合が、学校支援ボランティアを「ま

ったくおこなったことはない」人が38.3%であるのに対して、「1~2回おこなったことがある」人では44.9%、「何回もおこなったことがある」人では42.5%と高い割合を示しているという点である。また、1(あまりあてはまらない)と回答した人は学校支援ボランティアを「何回もおこなったことがある」人では0%で、一人もいないことがわかる。

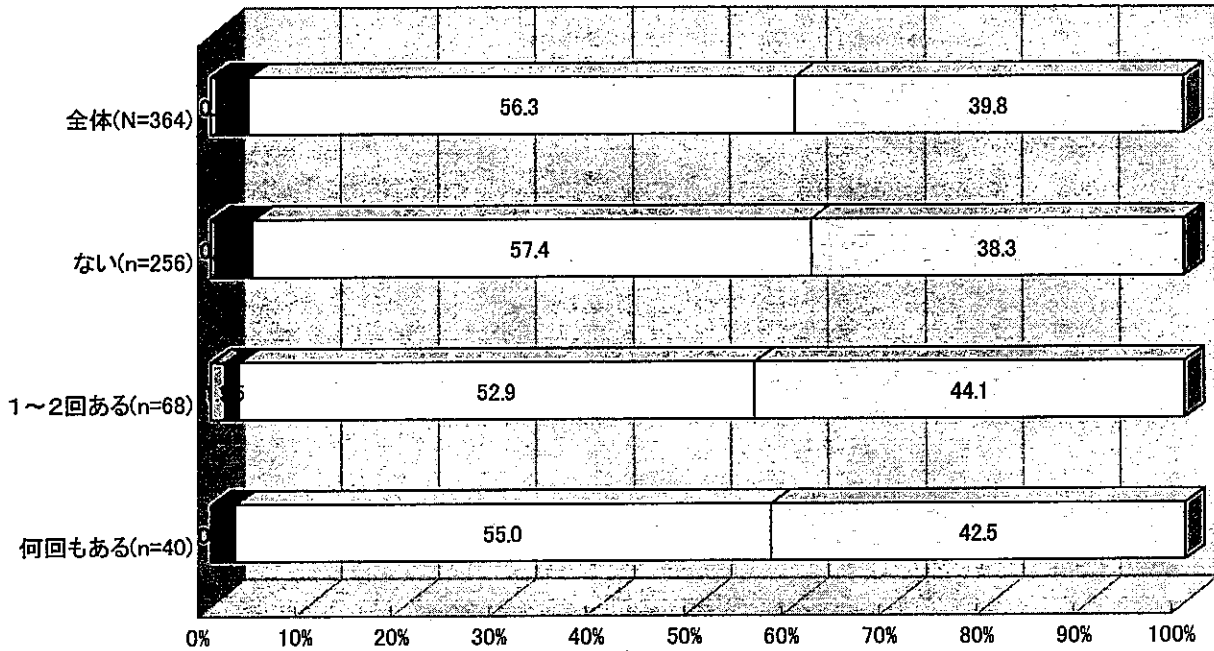
これらのことから、学校支援ボランティアを「全くの未経験」の人よりも、「多少の経験がある」人や「ある程度継続して経験のある」人の方が、家庭では子ども(孫)の長所をよくわかっている人が多いのではないかと言うことができよう。

【グラフ7-1-2】

【問9. イ】子ども(孫)の長所をよくわかっている

回 1(あまりあてはまらない) ■ 2(どちらかといえばあてはまらない) □ 3(どちらかといえばあてはまる) □ 4(よくあてはまる)

【問1】学校支援ボランティア経験の有無



【グラフ7-1-3】は、【問1】の「あなたは、これまで学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」という設問に対して、それぞれ①「まったくおこなったことはない」、②「1～2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人が、【問9. ウ】「子ども(孫)とよく話をしている(よく話を聞いている)」で、4(よくあてはまる)・3(どちらかといえばあてはまる)・2(どちらかといえばあてはまらない)・1(あまりあてはまらない)のいずれを選択しているかをクロス集計してみた結果を示しているグラフである。

まず、グラフを見て明らかなのは、4(よくあてはまる)と回答した人の割合が、学校支援ボランティアを「まったくおこなったことはない」人が41.0%であるのに対

して、「1～2回おこなったことがある」人では52.9%、更に「何回もおこなったことがある」人では55.0%とかなり増加してきているという点である。また、1(あまりあてはまらない)と2(どちらかといえばあてはまらない)を合わせた割合は、学校支援ボランティアを「まったくおこなったことはない」人は16.4%であるのに対して、「1～2回おこなったことがある」人では1.5%、「何回もおこなったことがある」人では2.5%に過ぎない。

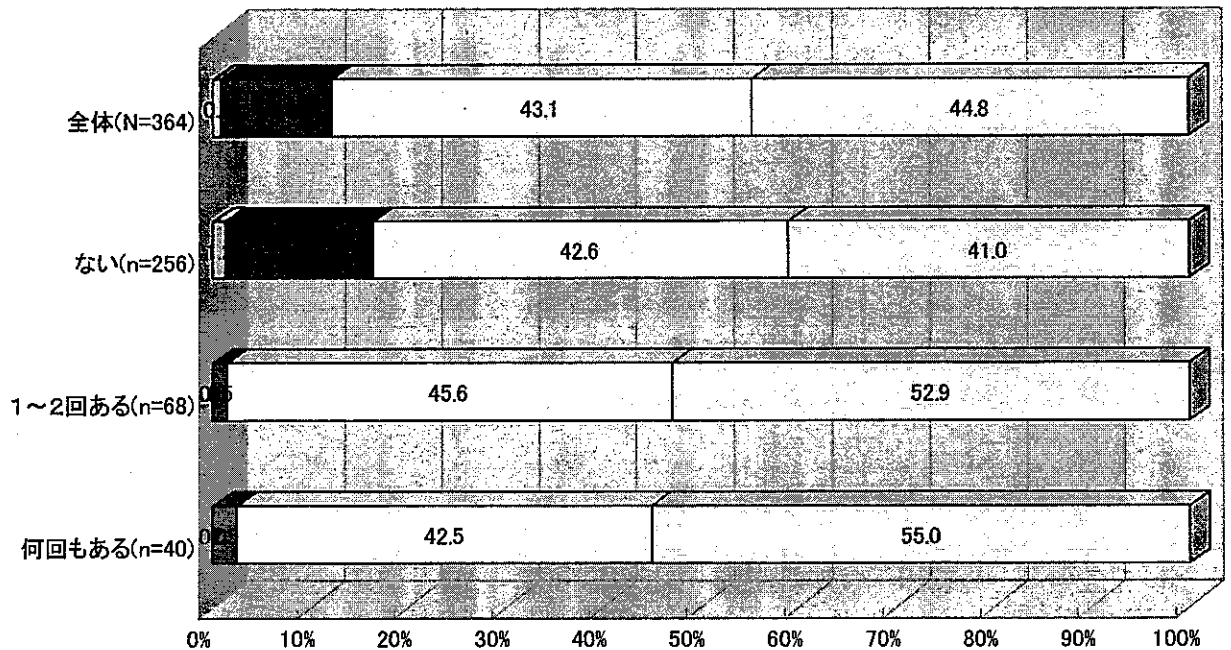
これらのことから、学校支援ボランティアを「全くの未経験」の人よりも、「多少の経験がある」人や「ある程度継続して経験のある」人の方が、家庭では子ども(孫)とよく話をしている(よく話を聞いている)人が多いのではないかと断言することができよう。

【グラフ7-1-3】

【問9. ウ】子ども(孫)とよく話をしている(よく話を聞いている)

■ 1(あまりあてはまらない) ■ 2(どちらかといえばあてはまらない) □ 3(どちらかといえばあてはまる) □ 4(よくあてはまる)

【問1】学校支援ボランティア経験の有無



【グラフ7-1-4】は、【問1】の「あなたは、これまで学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」という設問に対して、それぞれ①「まったくおこなったことはない」、②「1~2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人が、【問9. エ】「子ども(孫)といっしょに遊んでいる」で、4(よくあてはまる)・3(どちらかといえばあてはまる)・2(どちらかといえばあてはまらない)・1(あまりあてはまらない)のいずれを選択しているかをクロス集計してみた結果を示しているグラフである。

グラフを見てわかるのは、3(どちらかといえばあて

はまる)と回答した人は、学校支援ボランティアを「何回もおこなったことがある」人が55.0%と高い割合を示している。しかし、これまで見てきた【問9. ア】～【問9. ウ】とは異なり、4(よくあてはまる)と回答した人の割合が、学校支援ボランティアを「まったくおこなったことはない」人が21.9%、「1~2回おこなったことがある」人では35.3%であるのに対して、「何回もおこなったことがある」人では17.5%に過ぎなかった。

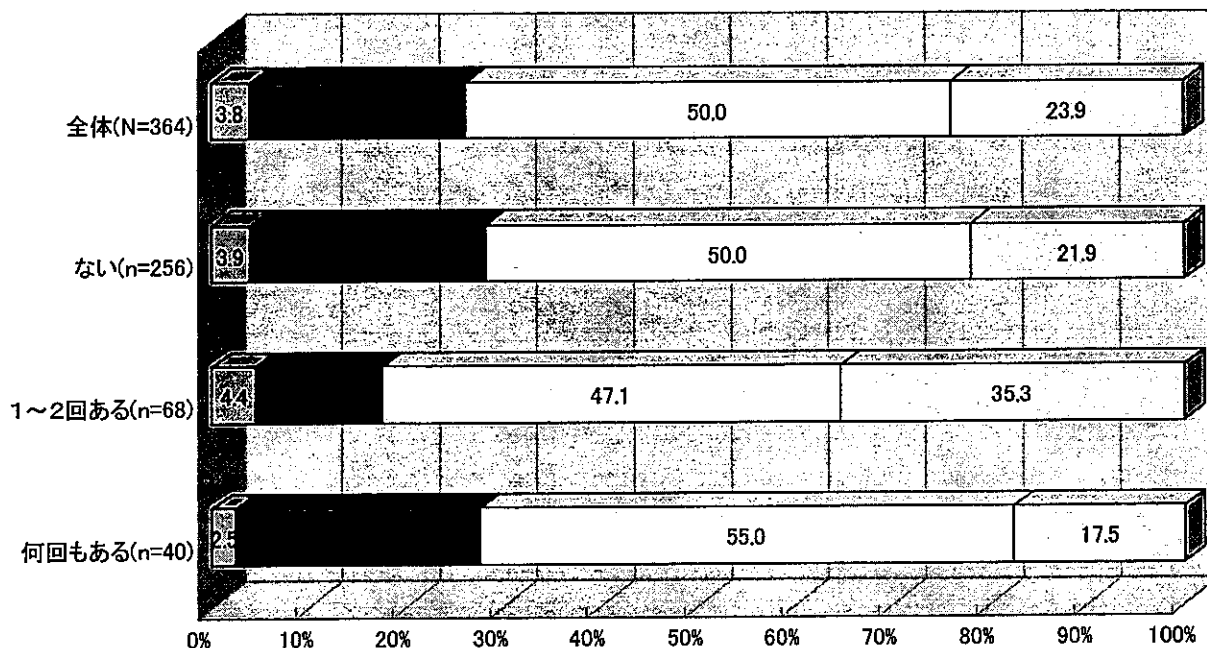
これらのことから、【問9. エ】に関しては、学校支援ボランティアの経験が家庭教育に与える効果は明らかにすることはできなかった。

【グラフ7-1-4】

【問9. エ】子ども(孫)といっしょに遊んでいる

回 1(あまりあてはまらない) ■ 2(どちらかといえばあてはまらない) □ 3(どちらかといえばあてはまる) □ 4(よくあてはまる)

【問1】学校支援ボランティア経験の有無



【グラフ7-1-5】は、【問1】の「あなたは、これまで学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」という設問に対して、それぞれ①「まったくおこなったことはない」、②「1~2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人が、【問9. オ】「子ども(孫)といっしょに食事をしている」で、4(よくあてはまる)・3(どちらかといえばあてはまる)・2(どちらかといえばあてはまらない)・1(あまりあてはまらない)のいずれを選択しているかをクロス集計してみた結果を示しているグラフである。

まず、グラフを見て明らかなのは、4(よくあてはまる)と回答した人の割合が、学校支援ボランティアを「まっ

たくおこなったことはない」人が57.0%であるのに対して、「1~2回おこなったことがある」人では70.6%、「何回もおこなったことがある」人では65.0%とかなり高い割合を示しているという点である。また、1(あまりあてはまらない)と2(どちらかといえばあてはまらない)を合わせた割合は、学校支援ボランティアを「まったくおこなったことはない」人では2割近く(19.9%)にもものぼっていることがわかる。

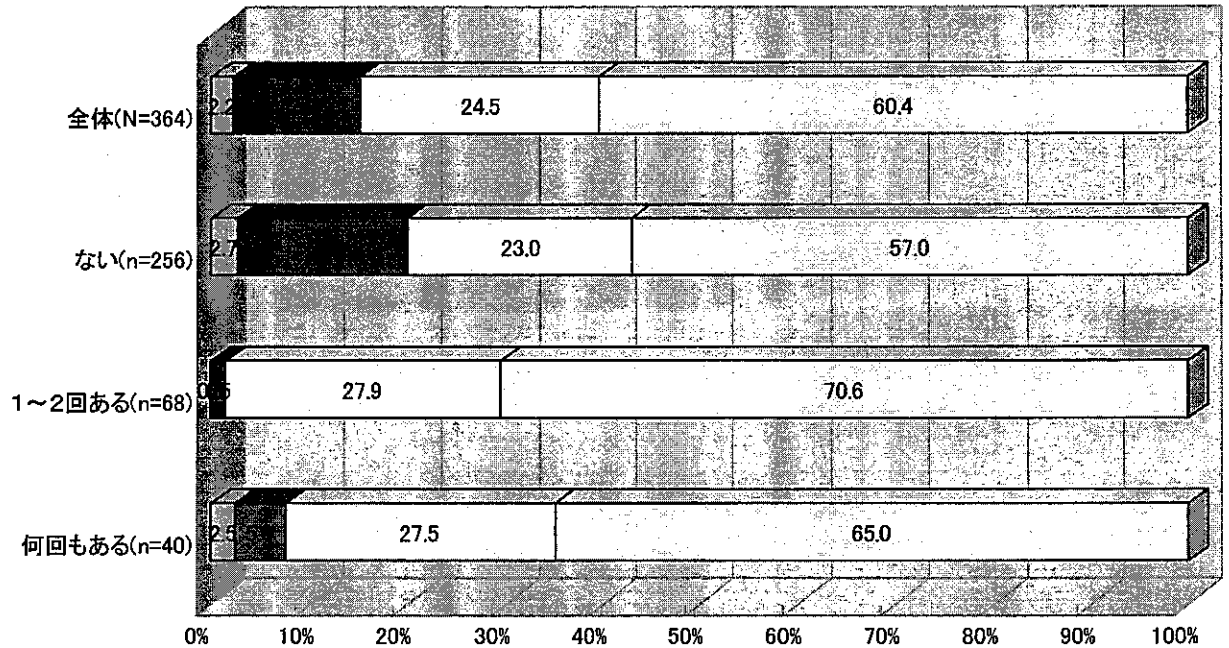
これらのことから、学校支援ボランティアを「全くの未経験」の人よりも、「多少の経験がある」人や「ある程度継続して経験のある」人の方が、家庭では子ども(孫)といっしょに食事をしている人が多いのではないかと言うことができよう。

【グラフ7-1-5】

【問9. オ】子ども(孫)といっしょに食事をしている

□1(あまりあてはまらない) ■2(どちらかといえばあてはまらない) □3(どちらかといえばあてはまる) □4(よくあてはまる)

【問1】学校支援ボランティア経験の有無



【グラフ7-1-6】は、【問1】の「あなたは、これまで学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」という設問に対して、それぞれ①「まったくおこなったことはない」、②「1～2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人が、【問9. カ】「子ども(孫)をよくほめるようにしている」で、4(よくあてはまる)・3(どちらかといえばあてはまる)・2(どちらかといえばあてはまらない)・1(あまりあてはまらない)のいずれを選択しているかをクロス集計してみた結果を示しているグラフである。

まず、グラフを見て明らかなのは、4(よくあてはまる)と回答した人の割合が、学校支援ボランティアを「まったくおこなったことはない」人が20.7%、「1～2回

おこなったことがある」人では27.9%であるのに対して、「何回もおこなったことがある」人では42.5%とかなり高い割合を示しているという点である。また、1(あまりあてはまらない)と2(どちらかといえばあてはまらない)を合わせた割合は、学校支援ボランティアを「まったくおこなったことはない」人は18.3%であるのに対して、「1～2回おこなったことがある」人では11.8%、「何回もおこなったことがある」では15.0%である。

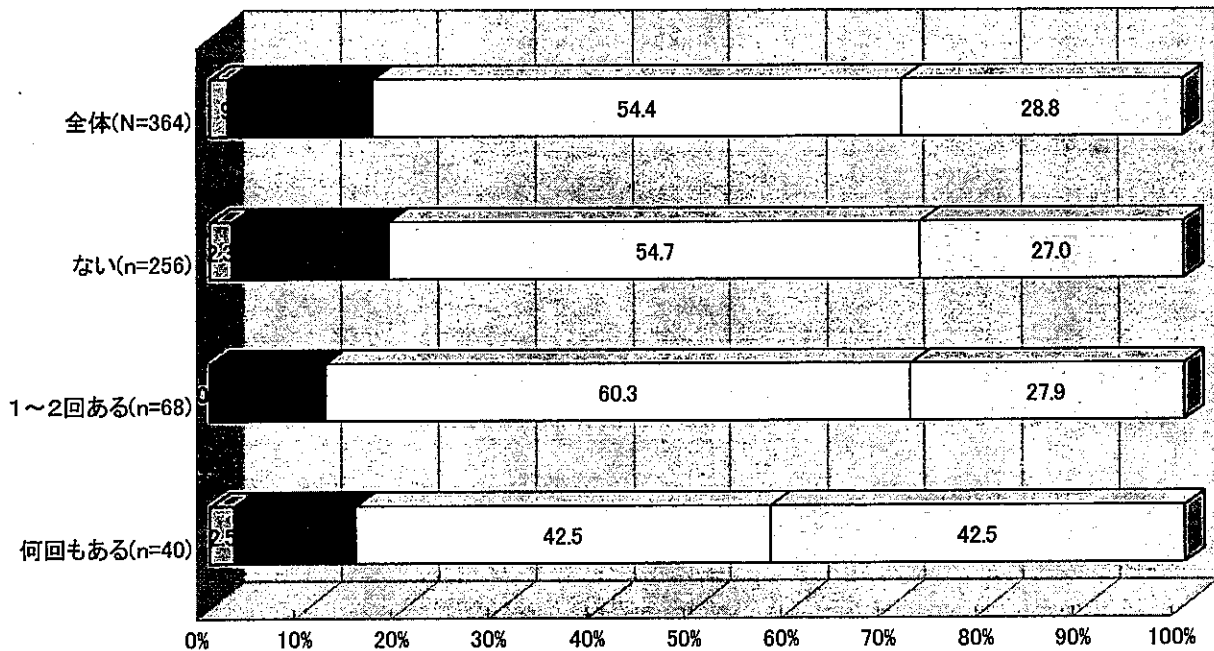
これらのことから、学校支援ボランティアを「全くの未経験」の人よりも、「多少の経験がある」人や「ある程度継続して経験のある」人の方が、家庭では子ども(孫)をよくほめるようにしている人が多いのではないかと言うことができよう。

【グラフ7-1-6】

【問9. カ】子ども(孫)をよくほめるようにしている

回 1 (あまりあてはまらない) ■ 2 (どちらかといえばあてはまらない) □ 3 (どちらかといえばあてはまる) □ 4 (よくあてはまる)

【問1】学校支援ボランティア経験の有無



【グラフ7-1-7】は、【問1】の「あなたは、これまで学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」という設問に対して、それぞれ①「まったくおこなったことはない」、②「1～2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人が、【問9. キ】「子ども(孫)の悪い行いに対しては厳しく叱っている」で、4 (よくあてはまる)・3 (どちらかといえばあてはまる)・2 (どちらかといえばあてはまらない)・1 (あまりあてはまらない)のいずれを選択しているかをクロス集計してみた結果を示しているグラフである。

まず、グラフを見て明らかなのは、4 (よくあてはまる)と回答した人の割合が、学校支援ボランティアを「まったくおこなったことはない」人が59.4%であるのに対

して、「1～2回おこなったことがある」人では64.7%、更に「何回もおこなったことがある」人では77.5%とかなり増加してきているという点である。また、1 (あまりあてはまらない)と2 (どちらかといえばあてはまらない)を合わせた割合は、学校支援ボランティアを「まったくおこなったことはない」人は8.6%であるのに対して、「何回もおこなったことがある」人では7.5%、「1～2回おこなったことがある」人では0%で一人もいない。

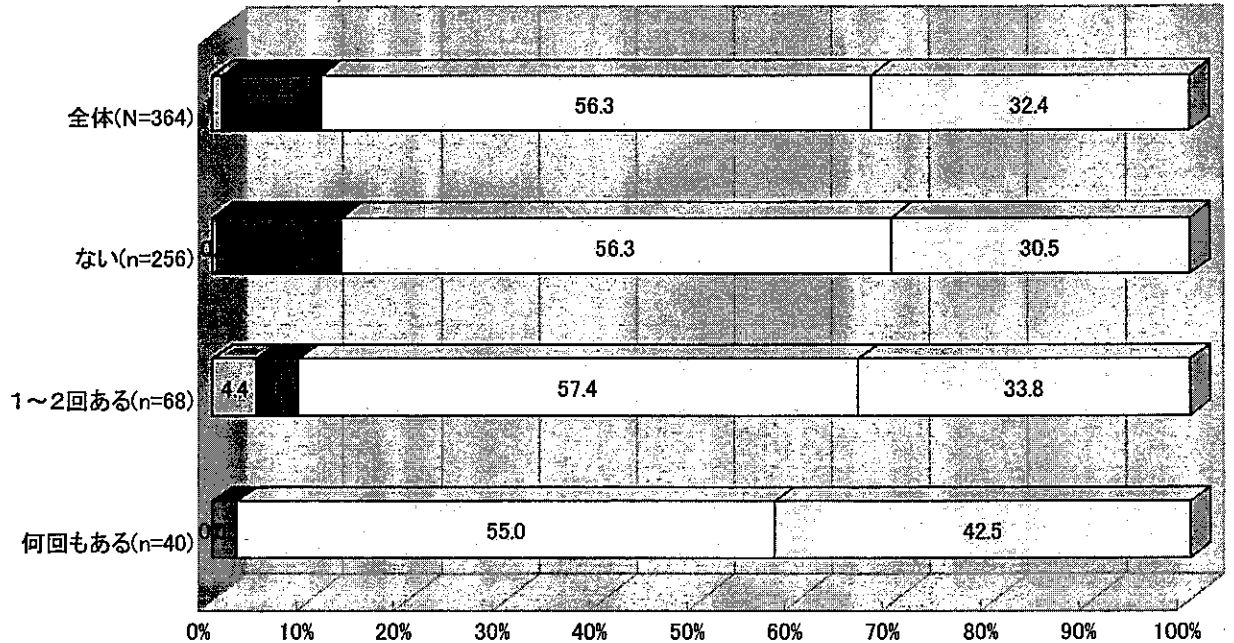
これらのことから、学校支援ボランティアを「全くの未経験」の人よりも、「多少の経験がある」人や「ある程度継続して経験のある」人の方が、家庭では子ども(孫)の悪い行いに対しては厳しく叱っている人が多いのではないかと言うことができよう。

【グラフ7-1-8】

【問9. ク】子ども(孫)に家庭のルールをきちんと理解させている

図1(あまりあてはまらない) ■ 2(どちらかといえばあてはまらない) □ 3(どちらかといえばあてはまる) □ 4(よくあてはまる)

【問1】学校支援ボランティア経験の有無



【グラフ7-1-8】は、【問1】の「あなたは、これまで学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」という設問に対して、それぞれ①「まったくおこなったことはない」、②「1～2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人が、【問9. ク】「子ども(孫)に家庭のルールをきちんと理解させている」で、4(よくあてはまる)・3(どちらかといえばあてはまる)・2(どちらかといえばあてはまらない)・1(あまりあてはまらない)のいずれを選択しているかをクロス集計してみた結果を示しているグラフである。

まず、グラフを見て明らかなのは、4(よくあてはまる)と回答した人の割合が、学校支援ボランティアを「まったくおこなったことはない」人が30.5%であるのに対

して、「1～2回おこなったことがある」人では33.8%、更に「何回もおこなったことがある」人では42.5%と増加してきているという点である。また、1(あまりあてはまらない)と2(どちらかといえばあてはまらない)を合わせた割合は、学校支援ボランティアを「まったくおこなったことはない」人は13.3%であるのに対して、「1～2回おこなったことがある」人では8.8%、「何回もおこなったことがある」では2.5%に過ぎない。

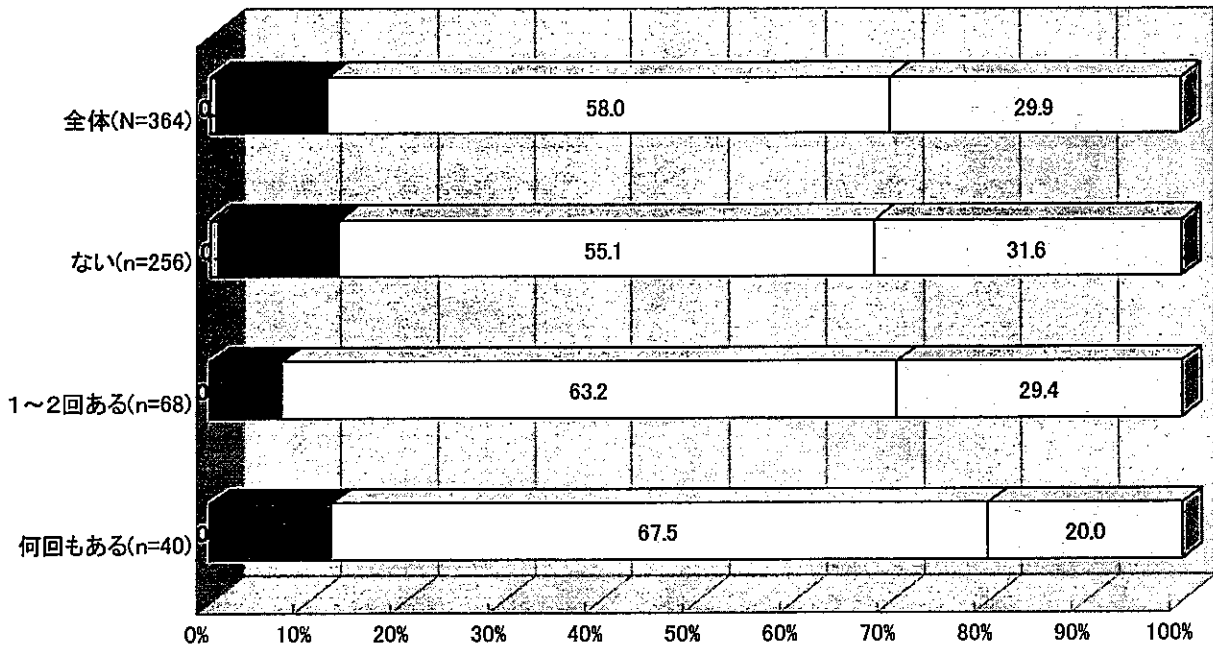
これらのことから、学校支援ボランティアを「全くの未経験」の人よりも、「多少の経験がある」人や「ある程度継続して経験のある」人の方が、家庭では子ども(孫)に家庭のルールをきちんと理解させている人が多いのではないかと言うことができよう。

【グラフ7-1-9】

【問9. ケ】子ども(孫)に自分のことは自分でさせるようにしている

回1(あまりあてはまらない) ■ 2(どちらかといえばあてはまらない) □ 3(どちらかといえばあてはまる) □ 4(よくあてはまる)

【問1】学校支援ボランティア経験の有無



【グラフ7-1-9】は、【問1】の「あなたは、これまで学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」という設問に対して、それぞれ①「まったくおこなったことはない」、②「1~2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人が、【問9. ケ】「子ども(孫)に自分のことは自分でさせるようにしている」で、4(よくあてはまる)・3(どちらかといえばあてはまる)・2(どちらかといえばあてはまらない)・1(あまりあてはまらない)のいずれを選択しているかをクロス集計してみた結果を示しているグラフである。

グラフを見てわかるのは、3(どちらかといえばあて

はまる)と回答した人は、学校支援ボランティアを「何回もおこなったことがある」人が67.5%と高い割合を示している。しかし、これまで見てきた【問9. ア】~【問9. ク】とは異なり、4(よくあてはまる)と回答した人の割合が、学校支援ボランティアを「まったくおこなったことはない」人が31.6%、「1~2回おこなったことがある」人では29.4%であるのに対して、「何回もおこなったことがある」人では20.0%に過ぎなかった。

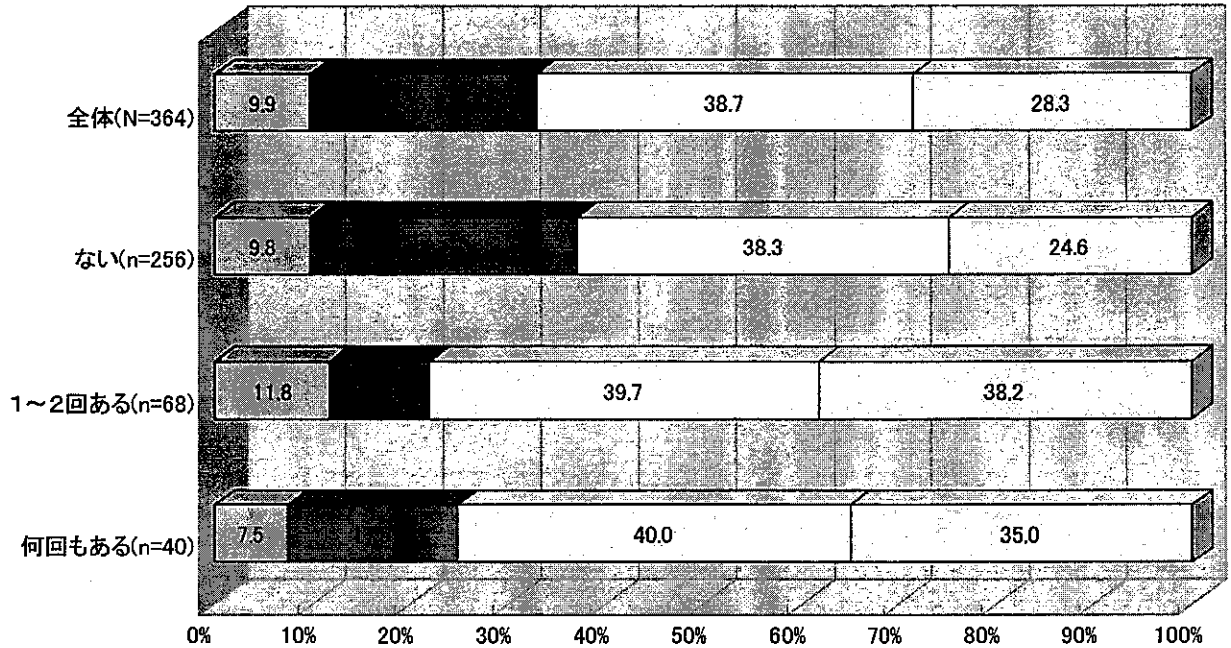
これらのことから、【問9. ケ】に関しては、学校支援ボランティアの経験が家庭教育に与える効果は明らかにはできなかった。

【グラフ7-1-10】

【問9. コ】子ども(孫)の教育のことで相談できる友人・知人がいる

■ 1(あまりあてはまらない) ■ 2(どちらかといえばあてはまらない) □ 3(どちらかといえばあてはまる) □ 4(よくあてはまる)

【問1】学校支援ボランティア経験の有無



【グラフ7-1-10】は、【問1】の「あなたは、これまで学校支援ボランティアをおこなったことがありますか」という設問に対して、それぞれ①「まったくおこなったことはない」、②「1~2回おこなったことがある」、③「何回もおこなったことがある」と回答した人が、【問9. コ】「子ども(孫)の教育のことで相談できる友人・知人がいる」で、4(よくあてはまる)・3(どちらかといえばあてはまる)・2(どちらかといえばあてはまらない)・1(あまりあてはまらない)のいずれを選択しているかをクロス集計してみた結果を示しているグラフである。

まず、グラフを見て明らかなのは、4(よくあてはまる)と回答した人の割合が、学校支援ボランティアを「まったくおこなったことはない」人が24.6%であるのに対

して、「1~2回おこなったことがある」人では38.2%、「何回もおこなったことがある」人では35.0%と高い割合を示しているという点である。また、1(あまりあてはまらない)と2(どちらかといえばあてはまらない)を合わせた割合は、学校支援ボランティアを「まったくおこなったことはない」人が37.1%であるのに対して、「1~2回おこなったことがある」人では22.1%、「何回もおこなったことがある」人では25.0%であることがわかる。

これらのことから、学校支援ボランティアを「全くの未経験」の人よりも、「多少の経験がある」人や「ある程度継続して経験のある」人の方が、家庭では子ども(孫)の教育のことで相談できる友人・知人が多いのではないかと言うことができよう。

Ⅲ章 まとめ

1 節 調査結果の要約とまとめ

(1) 回答者の基本的属性

回答者382名の子どもに対する続柄は、多い順に、母親181人(47%)、父親125人(33%)、祖母40人(11%)、祖父22人(6%)、その他(叔父叔母・兄姉)14人(3%)

であった。年齢については、占める割合が高い年代順に、30代151人(40%)、40代136人(36%)、60代32人(8%)、70代以上22人(6%)、50代21人(6%)、20代11人(3%)となった。つまり、本調査は30代・40代の母親・父親の意見が若干強く反映された結果になっていることにも留意しながら、数字を読み取っていく必要があると言える。

(2) 学校支援ボランティア経験の有無とPTA活動への関わり

学校支援ボランティア経験の有無を問うた結果では、母親・祖父・祖母の4割近くが学校支援ボランティアの経験があることがわかる。それに対して、父親で経験があると回答した人は1割強に過ぎない。

次に、PTA活動への関わり方については、母親の6割以上と祖母の4割弱が積極的に関わってきたと回答しているのに対して、父親の7割弱と祖父の8割弱はほとんど(全く)関わってこなかったと回答している。

また、学校支援ボランティア経験の有無とPTA活動への関わり方のクロス集計では、学校支援ボランティアの経験が何回もあると回答した人の5人に4人は、PTA活動にも積極的に関わってきたという、はっきりとした結果が得られた。

(3) 学校支援ボランティア経験のない理由と今後の意向

経験のない理由(単数回答)として一番に挙げられるのは「忙しくて時間がないから」(54%)、続いて「学校支援ボランティアのことがよくわからないから」(27%)で、上位2つの理由で全体の約8割となる。このことは、別の角度から見れば、保護者集団は「面倒だから・関心がないから」や「学校のことは、教員だけがやればよいと思うから」という理由で、ボランティアを行っていないわけでは決してないということを表している。

また、クロス集計の結果から、経験のない理由として「自分にもできると思われるものがないから」や「学校支援ボランティアのことがよくわからないから」と回答した人たちは、きっかけさえあればボランティアを行おうという意向があるということも確認できた。

(4) 学校支援ボランティアをおこなった動機と活動分野

全体的に見ると、「自分から率先して」が44%、「学校から依頼があり積極的に」が36%で、経験者の約8割は積極的な動機で学校支援ボランティアを行ったことがわかる。続柄別では、特に祖父の75%、祖母の60%が「自分から率先して」と回答しており、この2者はかなり自発的な動機で学校支援ボランティアを行っていることも明らかになった。

次に活動分野(複数回答)としては、「登下校の安全

支援」が51%で最も多く、「校外学習の引率支援」が47%、「農園活動などの支援」23%、「クラブ活動などの支援」21%と続く。続柄別にみると、母親では「校外学習の引率支援」が約7割、祖母では「登下校の安全支援」が8割以上とかなりの割合を占めているのが大きな特徴である。また、祖父の6割強が「登下校の安全支援」、父親の6割近くが「農園活動などの支援」を行っていることも特徴と言えるだろう。

(5) 学校支援ボランティア経験による自分への影響や自己の変容

学校支援ボランティアを行ったことによる自分への影響や自己の変容として、全体では7割以上の人々が「学校や子どもたちのことがわかるようになった」、6割以上の人々が「他の子(孫)にも目が向くようになった」と回答している。続柄別では上記以外で、父親は「もっと学校や子どもたちと関わりたいと思うようになった」、祖父は「新しい仲間と出会ったり交流が生まれやすくなった」「自分の気持ちに張りができた」「自ら学ぶ意欲が向上した」、祖母は「自分の子(孫)のことが、よりわかるようになった」の割合が他の続柄と比べて高いことが特徴と言える。

更に、活動分野とのクロス集計を行ってみると、「校外学習の引率支援」を行った人は「もっと学校や子どもたちと関わりたいと思うようになった」割合が他の分野よりも高く、これは、ある程度の時間、一定の子どもたちと行動を共にすることによって深く交わることができ、その体験がもっと関わりたいという思いに繋がっていったのではないかと考えられる。また「登下校の安全支援」を行った人は「自分の子(孫)のことが、よりわかるようになった」割合が他の分野よりも高く、これは週に何度も下校班に付き添うことにより家庭とは違った我が子(孫)の一面を見ることができたためと考えられる。

(6) 学校支援ボランティア経験者の今後の活動への意向

全体的に見ると、「特になし」と回答した人はわずかに4%弱であることから、経験者の大部分は、今後も継続して行く意向であることがわかる。中でも、「登下校の安全支援」(58%)と「校外学習の引率支援」(50%)は、引き続き活動への意欲が高い。これは、取り組みやすさだけでなく、昨今の児童生徒に対する痛ましい事件の続発により、子どもたちの安全・安心は何を置いても最優先されるべき喫緊の課題であるという保護者集団の思いが表れていると考えられる。また続柄別では、父親は他の3者と比べ、特に「各教科などの学習支援」と「クラブ活動などの支援」に対する意欲が高いという傾向が見られた。

更に、自分への影響や自己の変容とのクロス集計の結果、顕著であった点は、「もっと学校や子どもたちと関わりたいと思うようになった」人の3割以上が子どもと間近にふれあえる「読み聞かせなどの支援」を希望している点、「気持ちに張りができた」「学ぶ意欲が向上した」人の各々4割以上が自分の専門的知識を生かせる「各教科などの学習支援」を希望している点などである。

(7) 学校支援ボランティア経験の有無と家庭教育の意識との関係

学校支援ボランティアの経験が家庭教育にどのような効果をもたらすのか、その効果の一端を検証するために、ここでは共感・理解・対話・共遊・食事・賞賛・厳しさ・ルール・自立・相談相手という10の指標を仮に設けて、クロス集計を行ってみた。

その結果は、「子どもの気持ちをよく理解している」「子どもとよく話をしている」「子どもをよくほめるようにしている」「子どもの悪い行いに対しては厳しく叱っている」「子どもに家庭のルールをきちんと理解させている」という5つの項目で、学校支援ボランティアを「全く行ったことはない」人よりも「1～2回行ったことがある」人、更には「何回も行ったことがある」人の方が「よくあてはまる」と回答した割合が、明らかに増加している。

つまり、学校支援ボランティアの経験者は、家庭においては、子どもとよく対話し、その気持ちに共感し、賞賛しているとともに、家庭のルールや善悪の判断を教えている保護者が多いと言えるのではないかと結論に至った。

(8) まとめ

本研究の「保護者集団（父親・母親・祖父・祖母）が学校支援ボランティアを行うことによって、学校に関わったり自分の子（孫）以外の子と接したりする機会が多くなること、家庭での教育により効果をもたらしているのではないか」という仮説は、アンケート調査の分析等を通して、その一端を検証することができた。

今後、学校が家庭・地域との連携・協働を進めていく中で、学校支援ボランティア等による保護者集団や地域住民一人一人の学校や子どもたちへの関わりを更に促していくことが、学校教育のみならず、家庭教育の充実、更には地域社会の活性化に繋がっていくのではないかとと言えるだろう。

<参考文献>

本報告書を作成するにあたり、参考にした調査研究報告

書は以下の通りである。

1) 「町民の生涯学習に関する意識調査報告書」

発行日：平成18年3月

編集・発行：上三川町 上三川町教育委員会 上三川町生涯学習まちづくり推進本部

協力：宇都宮大学生涯学習教育研究センター

調査研究委員主査：佐々木英和 宇都宮大学生涯学習教育研究センター助教授

2) 平成17年度「学校支援ボランティアに関する調査研究」報告書

発行日：平成18年3月

編集・発行：宇都宮大学生涯学習教育研究センター
栃木県総合教育センター生涯学習部

調査研究委員長：廣瀬 隆人 宇都宮大学生涯学習教育研究センター教授

おわりに

この度、平成18年度後期内地留学の機会をいただき、宇都宮大学生涯学習教育研究センターで研究活動に取り組んでまいりました。指導教官の同センター助教授佐々木英和先生には、本調査研究の実施にあたり、アンケート調査票の粹組みから調査分析の手法、調査結果の整理の仕方にいたるまで、非常に多くの具体的なご教示をいただきました。あらためて御礼申し上げます。

また、同センター長の塚本純先生、同教授の廣瀬隆人先生、研究生の星育夫さん、高木真喜子さんにもたくさんの貴重なご意見をいただきましてありがとうございました。

この内地留学中に、様々な方々と出会い、その方々から多くのことを学び、そして自己を振り返ることができたことが、私にとってかけがえのない大きな財産となりました。

今回の調査を行うにあたりまして、現在勤務しております栃木県宇都宮市立陽光小学校の高梨敏朗校長先生をはじめ職員の皆様、さらにお忙しい中、時間をさいてアンケート調査にご協力していただいた保護者の皆様にも謹んで感謝の意を表します。

最後になりましたが、貴重な研究の機会を与えてくださいました栃木県教育委員会、河内教育事務所、宇都宮市教育委員会、ならびに内地留学期間中、温かくご支援

くださいました宇都宮市立陽光小学校高梨敏朗校長先生をはじめ、同校の職員の皆様方に厚く御礼申し上げます。

2007年3月